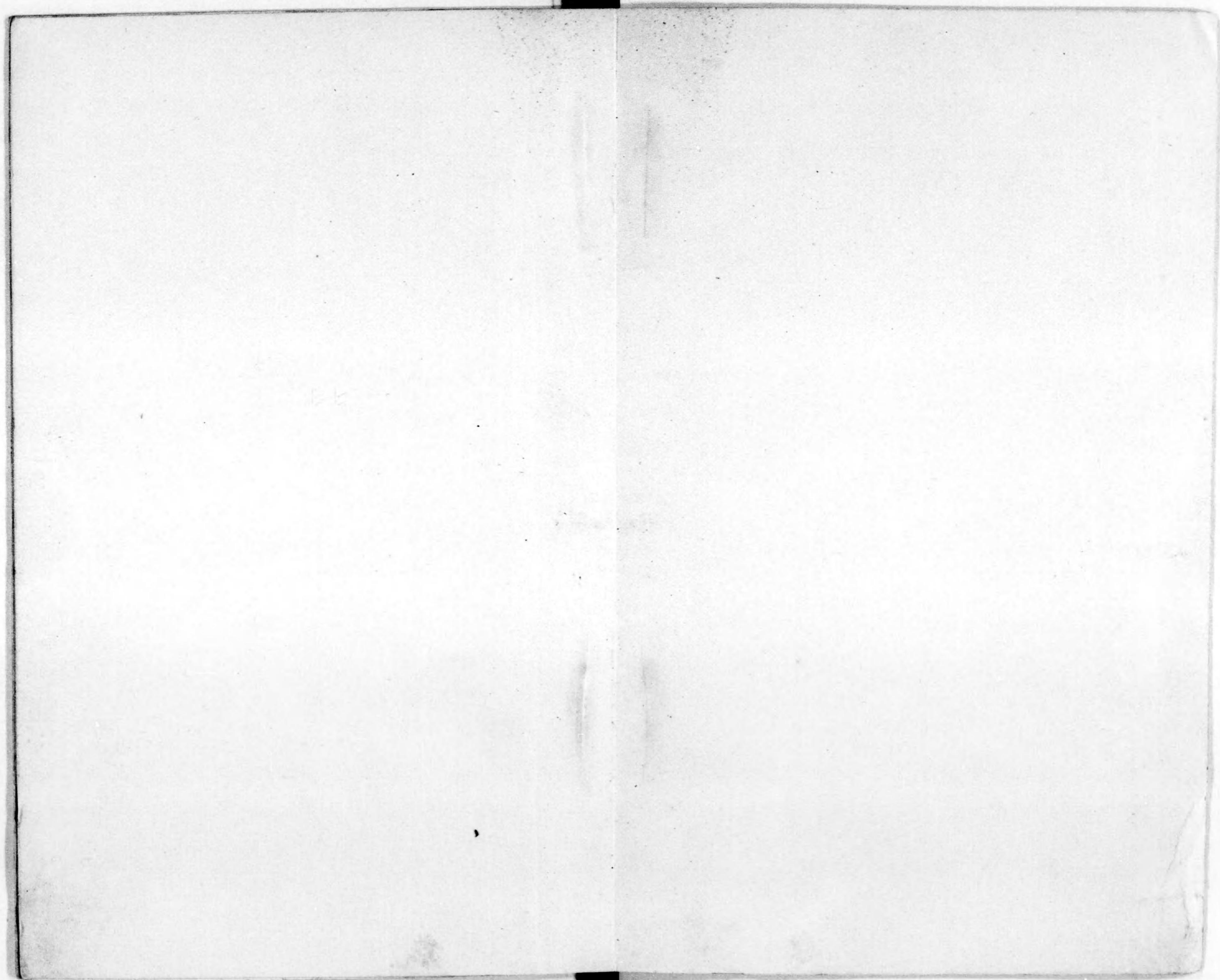


始





進徳修業

一 武士道に於て相くれぬ事

間敷事

一 主君に忠義を可著る事

一 親に孝行可せし事

一 大慈悲心を相とす諸人の為

たよりん事

録葉隠集中之語

正
3. 3. 11
内交

特101
332

豫章

例言

一、此編は、佐賀市中等學校の協定により、生徒をして、諷詠吟嘯して、感奮興起し、以て、性情を融和し、氣質を變化し、高尚なる人格を修養し、延きては、祖先を愛重し、前輩を尊崇し、報本反始の美俗を馴致し、かの葉隠武士の遺風を顯彰せしむる資料にせむとして、合選せしを、之が編次と、之が訓點解釋とを舉げて、箋に囑せられたるもの

なり。乃其の解釋の頗る煩瑣に涉り、老婆の絮談に類するものあるは、此等の生徒の理解し易からむを欲したればなり。若し夫れ錢の譎陋なる、或は訓點解釋の妥當を缺けるものあらば、幸に、識者の指摘して是正せられむことを祈る。

一、此編、分ちて内外二集とし、内集は、専ら佐賀縣人の作を收め、其の他の作は、總べて之を外集に收め、外集、更に之を上下の二に分つ。只、山田天山一首、此の例に依らず。而して、次序は、閑雲二公、及、公族の外、概、歿年の先後に隨ふ。

一、漢詩と和歌とを問はず、今日の所謂文學の發達變遷の軌道を逸せず、感興の作先起りて、後に、題詠漸創りしものなれば、題序若は詞書を存するは、無用の長物たるに似たり。されど、已に題詠創りてより後は、其の題等を見て、其の作に於ける、作者苦心慘憺の迹を認め、又、意味の深長なるを覺ゆるもの、少からず。而して、是、獨、題詠の作のみならず、感興の作に於きても、亦、此の如きものあり。されば、此編、其の冗長なるを厭はず、務めて、題序、詞書を録すること、せり。看る者之を蛇足視する勿れ。

一、近時漢詩を解釋するに、往往歐詩 Epic. Lyric. に擬して見むとする者あり。是、謬見なり。漢詩には、自ら漢詩の源流ありて、歐詩若は和歌と混同すべからず。揚子江と、ユーフラット若は筑後川と源流を同じくせざるが如し。はた、櫻花、牡丹、薔薇の培養法を異にせるが如く、思想表示の鍛鍊に於きても、異なる所あり。若、之を同一視せば、是、妄人ならむのみ。されば、漢詩には、自ら漢詩の解釋法あり、歐詩を以て律すべからず。又、漢詩には、字句面の意のみならず、必、裏面に寓意の存するものあるべしと

て、穿鑿する輩あれど、是も、亦、偏見なり。抑、毛詩は舊し。風雅頌を經とし、賦・比・興を緯とせること、今論ずるを須たす。されば、唐・宋・金・元以下、はた、我邦の漢詩、いづれかその下流ならざる。中には、風雅頌もあり、賦・比・興もあり。豈、比の一體のみを取り、若は賦、若は興の一體のみを取りて、視るべけむや。看者幸に意を致せ。更に、謝疊山の唐詩を説く、既に議論あるを思へ。

一、此編の訓點につきて、或は、漢文の常例に違へるありと謂ふ者あらむ。或は、國語法の定則に反せるありと謂ふ

者あらむ。蓋、散文と韻文とは、自ら異なる所あり。又、諷誦に便にせむがために、ことさらに、動詞・形容詞の語尾、助動詞、互爾乎波を、省畧せるあり、倒置句の如く讀まするあり。かの江帥の月には上る長安の百尺樓、又、紀氏の、棹は穿つ波の上の月を、舟は襲ふ水の中の天をの讀法に想到せば、思半に過ぎむ。

一、漢詩は、古文と異にして、俗語を挿入することを妨げず。即、閑却・驀地・踏破・愁殺の如き、是なり。此等の却地・破・殺等は、俗語の助辭にして、常に、消却・失却・特地・撲地・道破・驚破・忙殺・恨殺等と用ゐ、シリゾク、トコロ、ヤブル、コロス、又は、ソグ等の重き意あるなし。されば、現代讀などと稱して、踏破を、フミヤブル、愁殺を、シウサツなどと誤讀し、ヤブル、コロスの義として、解釋すべからず。

一、此編、標註、字句を掲げて解したるあり、(一)(二)(三)等を記して釋したるあり。(一)(二)(三)等は、多く、全句の意を解釋したるものにて、こは、第一句・第二句等の畧符なり。起・承・轉・合・領聯・頸聯等の語を用ゐむより、簡にして明なればなり。

一、起・承・轉・合・聯句・押韻、及び、古體樂府に在りては、押韻の轉

換、一解一段意義の斷續等を指示するは、漢詩を説くに
つきて、必要事項なれど、専門以外の人には、多く、其の必
要を認めざるのみならず、標記せむ餘地にも乏しけれ
ば、他日、或機會を得て、語ぐることゝせむ。

大正二年十一月十日、忠宣公尊像撤障の後三日、佐嘉舊城
内なる僑居、黃鞠花猶ほ香を吐く處に識し、且、拙詩一章を
附記して、成風を俟つ。

狷庵藤井 箋

拜_二

忠宣公尊像_ヲ謹賦_ス

蹕厲風神颯爽姿尊攘唱首想_フ當時_ヲ見機審敵雄

圖在_リ猶_ホ記_ス和親誤國詩_ヲ。余幼時喜誦_ニ故_ニ公自_レ古和_レ之。

大正歲次閏逢攝提
格第二月聚珍印行

豫章

目次

內集

七言絕句

示香燒島屯戍將士

四十八盤

二月廿七日遊鵠野賞花得二十八字

石闌沂河上舟中作

穀雨後一日遊棟莊偶作

闕題

秋菊

雲同同同同閑

叟 叟

公上上上上公

七 七 六 五 五 四 一

... (1) ...

月夜渡永江
河上亭小坐
獄中作
榮城
雪中訪江元實山居遂造高藏寺
偶成
春雨思鄉
山行示同志
聖廟
濱崎懷古
曉出國門
京師漫吟

釋大湖
同紫洋上
橫尾紫
原田復初
古賀朝陽
枝吉神陽
大園梅屋
草場佩川
江藤南白
同上上
同上上

八八八九二二二二二二二二二二二二二二二二

金福守即事
湊川楠公墓
跨馬渡禮文化山
游阿彌陀寺
橋津村居
寄副島謙助在東京
滋賀懷古
櫻塢春雲
長崎謠
楠公墓
偶成
松原神苑

同島國華上
同東洛上
福田東洛上
大野梁村
原田紫陽
三好十洲
千住西亭
服部滄洲
草場滄洲
谷口藍山
同口藍上

四五五六七七七七七六六六六六六六六六六六六六六六

石場
川上

五言絕句

言志

山寺觀楓

柳絮

七言律

大阪懷古

接徂徠計

患瘡賦以自慰

過蘆荊村弔橫尾紫洋先生墓慨然有作

過晴氣村

同副
島蒼海上

閑叟公

同上

同上

閑叟公

釋大潮

島國華

山田天山

草場佩川

三二

五言古

贈古賀溥卿

七言古

詠國史

發函輿赴蝦夷

那古屋懷古

九月廿一日夜月下試劍

備後三郎題詩櫻樹圖

至誠感神

和歌

都人來なる十可亭に一夜ねて

江戸の館にまかりける折

閑叟公 三

閑叟公 三

島國華 三

草場船山 三

谷口藍田 三

同口藍田 三

佐野雪津 四

閑叟公 三

閑叟公 三

雲叟公 三

雨中網代
 名處若菜
 羈中夢
 岸頭千鳥
 重くわづらひて
 祝
 佛狼察の軍船長崎の湊に來りし時
 遊 絲
 幽棲秋來
 孔子
 關路花
 待郭公

鍋嶋坦叟
 富本梅坡
 永淵有武
 堤範房
 峰矩當
 今泉千春
 羽室貞風
 岡本維鳩
 副島昭賢
 南里有隣
 寶珠庵梁山
 山領利昌
 五 五 五 五 五 五 四 四 四 四 四 四

千栗神社
 述 懷
 闕 題
 詠 史
 辭 世
 闕 題
 外集上
 七言絶句
 言 志
 偶 作
 九月十三夜陣中作
 題肖像

同野口喬樹上
 今泉千秋
 古川松根
 同川松根上
 今泉蟹守
 細川常久
 武田機山
 上杉霜臺
 新井白石石
 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五 五

寄題豐公故墟

夜下墨水

赤馬關

麿島

冬夜讀書

楠公別子圖

泉岳寺

隈川

桂林莊雜咏示諸生

贈正一位和氣清麻呂公贊

大楠公

和春盡雨窓

松前作

欲出鄉題壁

曾我兄弟復讐圖

風雨望寧樂

芳野

偶成

闕題

同

觀那以也哥羅瀑布

偶成

牧童牛背圖

源三位

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 賴 | 同 | 梁 | 同 | 廣 | 坂 | 賴 | 菅 | 龜 | 伊 | 服 | 荻 |
| 鴨 | | 川 | | 瀨 | 井 | | | 井 | 形 | 部 | 生 |
| | | 星 | | 淡 | 虎 | 山 | 茶 | 南 | 靈 | 南 | 徂 |
| 厓 | 上 | 巖 | 上 | 莊 | 山 | 陽 | 山 | 冥 | 雨 | 郭 | 徠 |
| 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 | 壹 |

| | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 藤 | 森 | 松 | 成 | 同 | 西 | 木 | 同 | 藤 | 齋 | 僧 | 長 |
| 井 | | 平 | 島 | | 鄉 | 戶 | | 井 | 藤 | 清 | 尾 |
| 霽 | 春 | 春 | 柳 | | 南 | 松 | | 竹 | 拙 | 狂 | 秋 |
| 雲 | 濤 | 嶽 | 北 | 上 | 洲 | 菊 | 上 | 外 | 堂 | 狂 | 水 |
| 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 | 七 |

讀弘安紀

闕題

金州城作

寄家兄言志

七言律

漫成

謁加藤公廟

題兒島高德題詩櫻樹圖

鎌倉雜感

過田原坂

七言古

下筑後川過菊池正觀公戰處感而有作

佐藤牧山 七

乃木石林 七

同上 七

廣瀨武夫 七

蒲生修靜 七

賴山陽 七

齋藤監物 七

小野湖山 七

宮崎來城 七

賴山陽 八

述懷

被檻致過刀根河

大石櫻

熊本城

正氣歌

贈石井補天

樂府

蒙古來

和歌

沈疴之時歌

應詔歌

闕題

藤田東湖 八

雲井龍雄 八

鷺津毅堂 七

平野五岳 八

廣瀨武夫 九

宮崎來城 九

賴山陽 九

山上億良 九

海犬養岡磨 九

今奉部與曾布 九

喻族歌

蓮の露を見てよめる

寛平の御時せられける菊合に

闕 題

題しらす

題しらす

花のちるをよめる

年のはてによめる

月のたもしろかりける夜

題しらす

落葉如雨といふことを

堀河院に百首の歌奉りける時

故郷花といへる心を

晚霞といふことを

闕 題

題しらす

荒磯に浪のよるを見て

ひとり懐をのべ侍りける

題しらす

元弘元年八月云云

同じ頃武藏の國へうちこえて

梵網經序云云

闕 題

同

大伴家持

僧正遍昭

菅原道真

素性法師

讀人しらす

伊勢

紀友則

春道列樹

清原深養父

曾根好忠

源頼賢

源頼朝

平忠度

藤原實定

西行法師

源實朝

同上

同上

藤原俊成女

藤原師賢

宗良親王

慶政上人

頓阿法師

熊澤了介

九六

九七

九七

九九

九九

一〇〇

一〇〇

一〇二

一〇二

一〇三

一〇三

一〇三

一〇四

一〇五

一〇五

一〇六

一〇六

一〇七

一〇八

一〇八

一〇九

一一二

一一二

一一三

梅 闕 題
同 闕 題
丹 楓 溪
闕 題
每 朝 聞 鶯
闕 題
幸 逢 太 平 代
賀 茂 祭
闕 題
漁 舟 火
闕 題

春 闕 題
同 闕 題
同 闕 題
同 闕 題
花 之 歌 と て
桃 同 闕 題
夜 同 闕 題
山 中
闕 題

上 田 秋 成
橋 千 蔭
松 平 定 信
同 田 篤 胤
平 田 篤 胤
香 川 景 樹
同 上 上
同 上 上
橋 守 部
熊 谷 直 好
同 上 好
大 田 垣 蓮 月

一八
一九
一九
二〇
二〇
二一
二一
二二
二二
二三
二三
二四
二四

下 河 邊 長 流
荷 田 春 滿
同 上 滿
荷 田 在 滿
加 茂 真 淵
同 上 淵
同 上 淵
本 居 宣 長
同 上 長
原 久 胤
橋 曙 胤
同 上 胤

一三
一三
一三
一四
一四
一五
一五
一六
一六
一七
一七
一八

早發白帝城
 除夜作
 江村即事
 江南春
 山行
 淮上與友人別
 東欄梨花
 題青泥市寺壁
 偶成
 題秋江圖
 七言律
 村居初夏

陸 倪 朱 岳 蘇 鄭 同 杜 司 高 同
 空
 游 瓊 熹 飛 軾 谷 上 牧 曙 適 上
 二六 二五 二四 二四 二三 二三 二三 二三 二三 二〇

同 同
 春 月
 秋の歌の中に
 陸軍始の行幸を拜みて
 闕 題
 同 同
 外集下
 七言絶句
 黃鶴樓送孟浩然之廣陵
 望廬山瀑布

同 李 乃 高 同 落 正 同 井 木
 木 崎 合 岡 上 戶
 希 正 直 常 文 孝
 上 白 典 風 上 文 規 上 雄 允
 二〇 二九 二六 二六 二七 二六 二五 二五 二四

過零丁洋

七言古

貧交行

文

天

祥

三七

杜

甫

三六

豫章

內集

佐賀市中等學校 合選

藤井 錢鏗卿 點註

七言絕句

天保辛丑之春。崎鎮防衛常額之

外。撰_レ少壯之士若干。屯_ニ戍_ニ于香燒

〔天保〕仁孝天皇の時
の年號。辛丑は其の
十二年。尊齡廿有八。
〔香燒島〕長崎縣西彼
杵那。深堀の前面に
在り。

〔愉〕愉と同じ。トウ。苟且也。後の事なき考へぬ。

〔餒〕飢乏也。腹へりて力なき意。〔跳盪〕をどりうごく。敵を對陣して、まだ戦を交へぬうちに、まだはやく、堅く衆を敵をうちやぶる。〔厭飫〕エンヨ。飽くる意。厭、善く修養する意。厭、憂と同じ。〔擊刺伊唔〕武術の學問。伊唔は、讀書の聲。〔淬厲〕にらぎごとく。劍なきを作るに、燒

きて水に入れ、きたへかたくし、又、きたみがたくし、一心に勉強する。厲、礪と同じ。〔戎虜〕はびす。歐米諸國を指す。

〔祖宗遺澤〕鍋島家直茂公以來代々の君の恩。〔緯武經文〕武を機の横糸とし、文を縦糸として布帛を織る如く、身を立って、國を治る業、即ち、武術學問を兼ね修め、〔成就〕セイシュユリ。したてあぐ。〔桓桓〕武きさま。〔瓊浦〕たまの浦。長崎。

島。以爲永制。嗚呼。太平士習日愉。雖有習刀槍弓銃之技者。膽怯氣餒。白面油滑。不足中兵刃跳盪之用。而屯戍二歲。寢處乎風潮霧露之中。厭飫於刺擊伊唔之間。勞苦其體膚。淬厲其精神。則生死之念

輕而忠義之心重。其所成就果何如也。然則此舉。不啻備戎虜而已也。閑叟公

壯士荷戈氣凜森。祖宗遺澤入人深。學將緯武經文業。成就精忠金鐵心。瓊浦邊防是要衝。桓桓貔虎勢橫縱。

〔吾家氣〕鍋島武士の氣風。
 〔天正文祿〕正親町天皇後陽成天皇の時の年號。
 〔天正文祿〕直茂公の龍造寺隆信父子を佐けて數戰ひ、朝鮮の役、先鋒となり、于勝茂公と共に一敗をも取られしことなきをいふ。
 〔孤島〕香燒島。
 〔決皆〕目を見はる。
 〔黠奴〕こさかしきやつ。歐米人を指す。
 〔四十八盤〕東松浦郡松浦川の勝地、船山翁の詩にも、松水四十八曲流、風霞露荻滿江秋とあり。
 〔豫章〕くす。こ、佐賀を指す。佐賀も、佐嘉。昔、樟樹高く榮

挽回古昔吾家氣、磨出天正文祿鋒。
 孤島結團意氣豪、西南決皆萬重濤。
 黠奴若有窺邊事、羶血飽膏日本刀。
 四十八盤 同上
 蘆荻如銀楓葉黃、江雲煙樹對斜陽。
 孤帆出沒秋千里、何處青山是豫章。

〔鶴野〕神野。
 〔開〕水門。
 嘉永三年尊齡三十有七。

嘉永三年尊齡三十有七。

二月廿七日遊鶴野賞花得三十一
 八字 同上
 守園老吏費培栽、李白桃紅次第開、
 最憐窓外千竿竹、依舊清陰待我來。

石闌泝河上舟中作

同上

〔雲林〕元季の人、姓は倪、名は瓚、字は元鎮、雲林は其の號。畫を善くし、又、詩を善くせり。
 〔放翁〕南宋の詩人。唐宋六大家の一。姓は陸、名は游、字は務觀、放翁はその號。
 〔香魚〕あゆ。
 嘉永六年尊齡四十。
 〔穀雨〕二十四氣中なる三月の中。

〔棟橋〕多布施川に架れるせんだん橋。

河上溪、山秋最奇。
 雲林、圖畫放翁詩。
 木犀花發酸柑熟。
 正是香魚欲下時。

穀雨後一日游棟莊偶作二首

同上

偶向棟橋橋北尋。
 飛花啼鳥正春深。
 平生不好凡桃李。
 獨倚曲欄看綠陰。

〔二頃〕田百畝を頃とす。
 〔辜負〕そむく。

〔三四〕自分は、仕をやめ歸田することと思はすして、この春の景色を見ざることを四十年なりの意。この東風四十春、原、春風、四十年に作れり。蓋、傳寫の誤なるべければ、改めつ。

〔松釵〕松のかんざし。松葉。

〔到頭〕どこまでも。四田園趣味と、禪學趣味と、半分づつなりの意。

二頃、山園久棘榛。
 書堂無主燕來頻。
 英雄未結歸田夢。
 辜負東風四十春。

雲叟公

松釵煎茶翠煙紛。
 化作前林一帶雲。
 吾性到頭耽底事。
 野情禪趣正中分。

秋菊

同上

(四) いかにして、善きものにしたてあげ、此の花に似たることを得べきか。さりこを修養し善きものにせずして、善きもの裁同し。

〔夜珠〕夜光珠。月をいふ。

秋菊雖ドモナリト天人チ力多シ。

養培至ニ處耀ク靈葩ニ。

世間無限讀ム書ヲ士。

爭得イカデカ材成シテ似ル此花ニ。

月夜渡ル永江ヲ。

釋 大潮 元皓

七里灘頭濤蹴ム天ヲ。

高帆擁ム月夜珠懸ル。

望來岸畔鐘聲起ル。

霜滿ツレドモ篷窓ニ且未眠ラ。

河上亭小坐

同 上

水淺ク沙明カニ波作ス紋ヲ。

山青ク巖碧ニシテ鳥聲聞ユ。

臨流小坐孤亭上。

影落ル前峰幾片雲。

獄中作

横尾紫洋道質

已迎ニ四十九年春。

又遇フ乾坤花鳥新ナレニ。

自愧ラ平生無ニ事業ニ。

蹉跎シ空作シテ一陳人ト。

榮城

原田復初喬

紫洋翁、夙に勤王説を唱へ、幕府の忌諱に觸れ、遂に、斬に處せられき。
〔乾坤〕天地。
二天地間の萬物、皆新しくなりて、春らしくなれり。
〔無事業〕何の稱すべき事業をも成さず。
〔蹉跎〕時を失ひて。
〔榮〕即、佐嘉、上に見ゆ。

〔蔭〕おほひて、かげを蒙らす。
 〔慶元〕後陽成天皇慶長、後水尾天皇元和、徳川氏の天下を定めし時。
 〔係〕名につけて。

〔鑿鑿〕鮮明なるをいへ。こゝ、環の音。
 〔若耶溪〕浙江紹興府にあり。こゝは、はかりて仙境に來りし趣あるをいふ。
 〔瓊花〕たまの花。木にづもりたる雪をいふ。

この詩、刀をかりて、自己の意氣を歌ひたるもの。
 〔芒蕩〕地名。漢高祖、豐西の澤中にて、大蛇を斬りしこゝあり。芒蕩は、始皇を避けて隠れし處。こゝ、諺記の誤なるべし。
 〔二〕好き機會に出あはずして、いつまでも、天下の英雄たる我を閑にすぎさせ、無用なるものにす。
 〔雙匣〕二振の刀のはこ。
 〔霜華〕刀の光。

百尺、老楠蔭、一郷。

參天蟠地幾千霜。

慶元、昌運天初定。

城係榮名、日月長。

雪中訪江元實、山居遂造高藏寺。

古賀朝陽能遷

展聲鑿鑿到山家。

雪滿峰巒獨煮茶。

乘興若耶溪上寺。

風吹雪木亂瓊花。

偶成

枝吉神陽經種

未向芒蕩斬大蛇。

百年閑却英雄手。

試開雙匣與君看。

萬丈霜華衝北斗。

春雨思郷

大園梅屋惟精

日歸日歸春亦暮。

此身汎似不維舟。

家山一夜東風雨。

空谷無人薇正柔。

〔羊腸〕つづらなり。山の勾配の急なる處の路。
 (四)學問は、一段一段進むごとに、異なりたる趣味を感じるが、山も高くなるにつれて、景色の變化するを覺ゆ。

〔聖廟〕孔子の廟。小城郡多久村に在り。
 〔尼丘〕孔子の父母、魯の尼丘山の神に禱りて、孔子を生みたり。名を丘、字を仲尼とつけたり。
 (三)四海に孔子を、(四)西海に孔子を、忠孝の人を守る神なり。

りさて、廟を建て、祀られたるが、その教、日本六十餘州に及ぶ。かぬ所なしといふ意。

〔龍船〕皇后のみふれ。
 〔皇猷〕後世にまで傳へられたる事業。
 〔茫茫〕廣大なる。ひろびろとしたる。

〔海嶽恩〕海よりも深く、山よりも高き恩。

山行示同志

草場佩川 韡

路入羊腸滑石苔。

風從鞋底掃雲迴。

登山恰似書生業。

一步步高光景開。

聖廟

江藤南白 胤雄

蔓柏茂松綠欲流。

聖祠人絕晝悠悠。

西溟猶有尼丘月。

却照扶桑六十州。

濱崎懷古神后征韓。初幸此地。

同上

龍船映日有光輝。數萬天兵張虎威。

千古皇猷向誰問。茫茫長海鳥空飛。

曉出國門。文久二年六月廿七日

欲報邦家海嶽恩。慷慨杖劍出關門。

〔晨星〕あさの星。
〔落落〕稀疎、げらげら。
〔蕭索〕ものさびし。
〔魂〕こころ。

〔羊犬〕歐米人を指す。
〔滿腔〕からだ中の。
〔慷慨〕激昂し、なげかへしく思ふこと。
〔回天策〕皇道の衰へたるを挽回して、盛に行はれむことをはかるかんがへ。

晨星落落風蕭索。毛髮衝冠壯士魂。

京師漫吟 同年八月

同上

皇道久衰羊犬羶。滿腔慷慨吐誰前。

一封密奏回天策。淚濺東山秋暮煙。

金福寺即事寺余所寓。大野山荒寺地。

同上

古寺疎窓雪又風。猿啼鬼嘯晝濛濛。

自悲海內多難日。將老深山幽谷中。

湊川楠公墓二首 島國華義勇

天日昭昭報恩心。出師未捷淚沾襟。

一抔不入室町籍。三尺鬣封松樹陰。

〔濛濛〕くらし。

〔抔〕ホウ。一抔、一つかみの土、墓のこころ。この墓の地だけには、足利の領分さならぬの意。
〔鬣封〕墓の形、馬のたてがみの上、肉薄きに似たるを馬鬣封さいふ。

〔何因〕勤王せるに因るの意。

名門斷絶果何因。

空駐孤墳在水濱。

君去乾坤長寂寂。

勤王如此復誰人。

跨馬渡禮文化山。

同上

〔崢嶸〕サウカウ、山の峻しき。

泥坂危蹊十里程。

人雄馬健下崢嶸。

〔鶴山〕鶴越。〔源郎〕義經。

吾還在過鶴山上。

不使源郎獨擅名。

游阿彌陀寺

福田東洛大介

壽永西奔事可憐。

雛僧長舌說當年。

英雄一代興亡跡。

賺得遊人抵百錢。

橋津村居

大野梁村平一

曾辱君恩及不才。

白頭零落不期回。

朝昏拜汲門前水。

流自芙蓉城下來。

梁村翁、父の謫せらるゝに從ひ、早津江に居られし時の作なり。蓮池侯之を聞きて、成章館都講の職に復し、世子の侍讀に任ぜられき。即、蓮池。〔芙蓉〕蓮。

〔壽永〕安徳天皇の時、西國に來りしこと。〔雛僧〕こぞう。〔長舌〕よくしゃべる。〔四遊觀人〕をだまして、縁起をきかせ、冥加錢百文を食ふ。

(二)昔から、良き君に出あひて、意見の用あらるゝことは、むつかしきものなりの意。

〔春秋〕魯の史の記の名。孔子之を修して、大義名分を明にし、人心を正し、世道を扶けられし書。

〔空言〕いふばかりにて、實際に行はぬ。

〔護衣冠〕夷狄を斥けて、衣冠をつけたる道の正しき中國を守護すといふ意。孔子の春秋をかりて、己の意を示す。

〔皇墟〕天智天皇滋賀大津宮のあと。今の天津市の東北にあり。

(四)平忠度さざ浪や滋賀の都はの歌の意。

〔氤氳〕氤氳如雲など、天地の氣の密に合ひて盛なるにいふ。うつかりとしたるさま。〔縹緲〕はるかにかすかなるさま。この詩櫻花を雲に見たて、の意匠なり。

寄副島謙助、在東京

原田紫陽種興

披書稱快掩書歎。千載遭逢眞獨難。

一部春秋明大義。空言猶自護衣冠。

滋賀懷古。三好十洲紀始

水弄漣漪日欲斜。皇墟何處問年華。

行人只長無窮淚。滋賀春風空落花。

櫻塢春雲。千住西亭健任

氤氳縹緲遶汀洲。幾簇白雲凝未流。

一陣風來還不惡。紛紛作雪灑行舟。

長崎謠。服部滄洲厚戴

高下樓臺列海灣。大洋萬里落窓間。

〔鵬飛〕帆を張りて行く船を喩へていふ。

〔嗚呼碑〕ナコヒ、徳川光圀の建てられたる、嗚呼忠臣楠子之墓の碑。

この詩、論語先進篇の終章を見るを要す。〔冠童〕男子二十而冠、又十五曰成童、即、若き者、小供をいふ。

〔宗廟〕朝廷にありて政事をする。〔會同〕諸侯の會合に介をへさなりて行く。〔詠歸〕温泉に浴し、風に吹かれ、詩を歌ひて歸る。

〔玲瓏〕光る。この石、羅馬より輸入したる。このにて、光澤あり。も、忠義の勳は、後の世まで輝く。意を含めていふ。

青天欲盡鵬飛外。一點雲煙吳越山。

楠公墓

草場船山廉

五畿山勢似奔波。一水南流是湊河。

河水空枯山鎖在。嗚呼碑畔夕陽多。

偶成

谷口藍田中秋

冠童相伴浴溫泉。柳綠花紅雨後天。

宗廟會同非我事。春風獨握詠歸權。

松原神苑

同上

霏微朝雨柳籠煙。魚躍清波數曲中。

往日廟謀誰第一。忠勳碑聳玉玲瓏。

石塲

同上

滿山如雪石縱橫。萬國爭傳良器名。

〔李三平〕陶工の姓名。
直茂公の朝鮮より歸
られし時、隨ひて歸
化し、後、始めて有田
に寮を開きし者。

〔梗〕秬と同じ。稻の
黏らぬもの。うるこ
れ。
〔年魚〕あゆ。

二百年前開^レ此^ノ業^ヲ。

朝鮮名手李三平。

川上

副島蒼海種臣

橘柚橙柑秋共黃。

遊人無^レ日不^レ思^レ郷^ヲ。

肥前、粳稻三百萬。

川上、年魚尺許長。

五言絶句

言^フ志^ヲ

閑叟公

爲^レ賢^ト治^ノ一^ノ國^ヲ。

女色誓^フ不^レ耽^ラ。

讀^ミ書^ヲ知^ラニ

大道^ヲ。何^レ處^ニ心^カ可^キ慙^ツ。

山寺觀^ル楓^ヲ

林楓紅^ニ似^リ錦^モ。

僧房白雲深。

更^ニ看^ル秋

文政七年、尊齡十有

〔鯨音〕木魚の聲。

文政六年、尊齡十有六

〔一〕晉謝道韞の雪の句、未如柳絮因風起を用ゐて、柳の實景を寫さる。〔浮萍〕柳の花の水の上、落ちたるものが、水に浮きたる水草の如きないふ。

色老イヌルヲ 夕照送ル鯨音ヲ

柳絮

柳絮因風起リ 化爲浮萍多シ 飄飄飛トシテ

疑雪フカト 艷於兩岸花ハナ

天保二年、尊齡十有八。

〔一〕龍のわだかまり、虎のうづくまりたる如く、要害堅固なる城郭を見て、豐太閤のすさまじき事業を想像する。〔六尺託〕幼年の君のせわをたのむ。二歳半を一尺とす。〔伊霍〕殷の伊尹、大甲を佐け、漢の霍光、宣帝を輔く。〔岳韓〕宋高宗の時の名將、岳飛、韓世忠。こゝ、加藤清正、眞田幸村、後藤基次等を指すか。〔昔日〕太閤在世の日。

七言律

大阪懷古

閑叟公

龍盤虎踞想雄圖 回望傷心發歎吁

六尺託非伊霍輩 三軍任有岳韓徒

月明樓閣歌聲絕 花落林園艸色蕪

昔日豪華何處所 萬松城上雨模糊

〔徂徠〕荻生雙松、字は茂卿。元祿頃の大儒。

〔締袍〕つむぎのわた事より、范唯須賈の故いふ。友人の情に

〔玄亭〕學理を研究するへや。〔明月没〕其の死に喩ふ。

〔清霜備〕氣の嚴なるをいふ。〔白雪〕古の陽春白雪の曲の如く、調高し。

〔方外〕作者僧なる故にいふ。〔知音〕心をよく知りあひたる親しき間柄の人。

〔朱絃〕朱ぬりの絲の琴。

接徂徠計

釋 大潮

十年分手阻締袍。

萬里懷人夢思勞。

豈謂玄亭遺草稿。

遽聞明月没蓬蒿。

千秋俠氣清霜備。

一代文章白雪高。

方外知音今已矣。

朱絃從此好誰操。

患瘡賦以自慰。

時在樺太烟留古麻府。

島 國華

辭家纔過一周年。

回頭遊蹤路八千。

節異初秋花尙發。

地偏白日霧常懸。

河山入眼句方澁。

瘴癘觸身瘡未痊。

遙夜痛疴眞難勝。

空思故里小温泉。

過蘆荊村。弔橫尾紫洋先生墓。慨

〔節異〕寒暖の時候、内地と異なりて。〔地偏〕土地がかたよりにて。〔瘴〕山川の惡しき氣に感じて起る疾。〔癘〕あしき瘡を生ずる疾。〔故里〕原、故山に作れり。失粘。蓋、傳寫の誤なるべし。

〔墓〕蘆荊村永明寺に在り。

然有作。

山田天山

山河不改昔人亡。

村樹蕭蕭蘆刈荒。

行客何無知古寺。

暮鴉唯見亂斜陽。

灑君獨有千行淚。

奠墓誰禁一瓣香。

今日先生應瞑目。

王家隆盛日爭光。

過春氣村遺墟 氏草場佩川

〔弄陰晴〕はれくもり
さたまらぬ。

〔租牛〕租さすべき穀
類をいふ牛。

〔七唐箕〕にてひだす聲、
又、もみすりうすに
て磨る音がする。
〔編伍兵〕今は尋常の
農民なれど、昔は隊
伍に編制せられて、
戦をもしたる兵なる
べし之意。

墟里傷心偶獨行。

小春天氣弄陰晴。

無邊落葉存喬木。

一片荒山認古城。

田馬租牛叱叱響。

風車土臼簸磨聲。

尋常百姓家多少。

定是當年編伍兵。

五言古

贈古賀溥卿 閑叟公

先生漢高孫。至今意氣烈。堂堂八尺身。心膽如金鐵。高名海內知。風采人所師。笑談經濟策。醉誦短長詩。余學先王道。實從六歲時。

天保二年尊齡十有八。
〔溥卿〕其の字。名は
蕭、號は毅堂。公の
傳より、累進して、
年寄役となり、教授
を兼ねらる。〔古賀氏本姓
劉。漢高帝の裔。〕

〔經濟〕經國濟民。國
を治めてゆく道。

〔先王〕孔孟の紹述
せられし堯舜禹湯文
武周公の道。即道義
の教。

〔眇身〕小さき身。

〔千乘〕戎車千乘を有
する身分。大國の君。
一乘は、甲士三百、
卒七十二、駟養卒二五、
兵車一、馬四、牛三
をいふ。
〔風化源〕徳を以て人
民を導き、教養して、
國を治むるもこ。

〔薪膽〕臥薪嘗膽。こ
、辛苦の意。

竊慕聖賢言。常尋入徳門。眇身本
菲才。何當千乘尊。唯因先生教。
得窮風化源。霜雪晨練武。筆硯夕
討論。君恩如海山。先生嘗有詩曰。
何及先生恩。薪膽廿年志。請看闔
國藩。男兒不徒死。我生豈偶然。

〔碌碌〕小石貌。用に
たへのをいふ。古
此の詩を讀みて、古
人師を尊ぶの厚き、
大國の君と雖も、
此の如し。以て、今人
の輕薄なるを、同じ
からざるを見るべし。

滿地多碌碌。慷慨獨仰天。此意先
生知。書以寄几前。

天保元年尊齡十有七。
正親町天皇元龜元年、
八月十九日、夜襲の
事を詠ぜられたるな
り。
〔八郎〕大友宗麟の族
親秀。川上村荒野の
上に墓あり。
〔今山〕佐賀郡川上村
の字。
〔牛毛〕學者如牛毛な
ぎ、多きをいふ。
〔豐士〕大友の軍。
〔轍中鮒〕車の輪の跡
のたまり水にゐる鮒。
命旦夕に迫れるをい
ふ。
〔震龍〕佐賀市精町泰
長院第二世。
〔布笠〕笠竹を用ゐ、
易にて占ふ。
〔三計〕夜襲城守降服
の三なるべし。

七言古

詠國史

閑叟公

八郎大舉寇榮城。今山山上列陣營。
三歲牛毛豐士數。轍中鮒魚是城兵。
帷幕如雲旗似霧。秋日煌煌劍華明。
震龍布笠決三計。發言盈庭議未成。

〔閻尼〕龍造寺家純の長女、直茂公の母。慶園院。

〔吾祖〕直茂公。

〔勝樂寺〕佐賀郡鍋島村東新莊にあり。

〔醒〕ふひつぶる、こ。

〔鼙雷答〕いびきの雷の如き聲、甲乙ひびきあふ。

〔鼓〕陣太鼓。〔擊〕大將のつぶりつづみ。即進軍の太鼓の聲。

〔如麻〕敵の死骸の亂れてあるをいふ。

〔松信勝〕成松信勝、この時、先鋒となり。又、親秀の走路に伏し、待ちて之を斬る。〔滅〕きりみ、こ訓す。れ、首を斬ること。〔鯨鯢〕わるもの、のかしら。親秀を指す。〔角崩〕獸の角のくづれたる如く勢衰ふ。〔烈祖〕いさを高き祖。亦、直茂公を指す。〔竹帛名〕歴史上の名譽。

〔函巖〕函館港。

〔丁巳〕孝明天皇安政四年。

〔菴花〕いちごの茂りて花の咲きたるをいふ。

〔沖〕一飛冲天など、高く飛びあがる。さふ、ひ、る、なご訓す。

〔鷗〕コッ。鷹属。くまたか。

閻尼叩^{イテ}席^ヲ激^シ衆^ヲ士^ヲ。吾祖擐^{キテ}甲^ヲ響^シ鏘^シ鏗^シ。

從^リ行^キ貔^ノ虎^ノ僅^ニ十^七。勝樂寺裏竹爲^ス旌^ト。

八郎眼中無^シ肥國^ニ。夜宴將卒皆醉醒^ス。

解^キ甲^ヲ弛^シ弓^ヲ鼙雷答^フ。何料陣前擊鼓聲^ヲ。

駭然但呼^フ敵軍至^{ルト}。蹂躪逃亡^{シテ}先是爭^フ。

吾祖指揮白羽扇^ヲ。殺敵如^ク麻相縱橫^ト。

龍家四傑松信勝^ト。滅^シ得^テ八郎實先鳴^ル。

鯨鯢一斃衆失^ヒ氣^ヲ。豐兵凜凜厥角崩^ル。

烈祖雄風轟^キ海内^ニ。千載永傳竹帛名^ヲ。

發^シ函巖^ニ赴^リ蝦夷^ニ。島國華^ニ。

維時丁巳閏五月^ニ。閑跨^ニ健馬早曉發^ス。

曠原開遍菴花^ヲ。雲煙消邊沖^ニ俊鷗^ト。

〔那古屋〕東松浦郡。

〔不可期〕豫め定めて必すべからず。

〔結髮云云〕元服して一人前の男となり、仲間の身分より立身して。

〔扶桑〕日の出づる處にある木にて、日本國をいふ。

〔鰈域〕朝鮮。鰈、鰈同し。セフ。

〔芳山宴〕文祿三年三月、豊公、秀次及諸將と、芳野に遊ぶ。

〔淋漓〕したるこゝろ。〔將星落〕諸葛孔明魏を征し、五丈原にて病死したる時、大星落ちたりこゝろ、大星閣の死をいふ。

〔班軍〕軍をかへす。〔群喙〕多くの人の口。〔嘖嘖〕大聲。やかましくいふ。

〔黠武〕武を用ゐすぎたるこゝろ。

〔黠兒〕沈惟敬等。〔燕雀何知鴻鵠志〕秦時、陳勝吳廣相語りし語。小鳥には、大鳥の心はわからぬ。

〔豪傑の心はわからぬ。英雄〕燕雀は、群喙。鴻鵠は、太閤に喩ふ。

〔鼙鼓〕鼙、飄也。〔鼙鼓〕鼙、飄也。

〔落落〕廓大、大きなさま。

〔弔鬼雄〕死にたる英雄を尋れ弔ふ。

〔啞然〕アクセン、笑ふ。

那古屋懷古

草場船山

興亡今古不可期。取快一時是男兒。

結髮起身奴隸伍。隻手折盡扶桑枝。

餘勇擬渡鴨綠水。蹂躪鰈域揚皇威。

飛花撲杯芳山宴。想見鮮血紅淋漓。

豈圖一旦將星落。北風吹送班軍旗。

群喙嘖嘖放譏議。或曰黠武或兒嬉。

或曰漫被黠兒賺。末勢不振國終衰。

嗚呼燕雀何知鴻鵠志。有似鼙鼓測

天地。英雄襟懷元落落。不因得喪

爲喜悲。偶歷舊墟弔鬼雄。寧將涕

淚霑殘碑。啞然大笑臨渤海。水天

一碧鵬雲飛。

九月廿一日夜。月下試劍。塾後有岡曰白

猿岡。

谷口藍田

〔三更〕子の刻、今の夜十二時。

壯士感秋夢屢驚。起開窓戶。月三更。
枕頭殘書置不讀。手提木劍呼敵行。
白猿岡上互相逐。五伐七伐響丁丁。

〔丁丁〕タウタウ。伐木聲。いへぎ、こ、こ、木劍相撃つ聲。

〔四客八影〕四人の影、八人の影。
〔劉季〕漢高祖。名は邦、字は季、斬蛇の事、上に見ゆ。
〔陶侃〕字は士行、晉人。侃在廣州、朝運百甓於齋內、莫運於齊外、曰、吾方致力中原、過爾優逸、恐不堪事、こ、こ、事ある日のために、筋骨を鍛へ、武術を鍊る意。
〔漁陽〕直隸順天府。〔漁陽鼓聲〕唐玄宗天寶十四載、朝廷の不意に、安祿山叛き、漁陽に起り、兵十四萬を率ゐて、攻め上りたる太鼓の聲。
〔兒島高德〕備後三郎と稱せり。

滿天霜冷月愈白。四客八影亂縱橫。
豈無劉季斬蛇勇。又擬陶侃運甓情。
此時曉風拂枯葉。恍聞漁陽鼓聲聲。
君不見忠信爲戈義爲甲。別有胸中
十萬兵。

備後三郎題詩櫻樹圖

(一) 後醍醐天皇隱岐に遷されさせ給ひしに喩ふ。
 〔魯陽〕魯陽侯、韓と戦ひ、日の入らんまするを、戈にて招きかへしたりといふ。
 〔虞淵〕日の入る處。
 こゝ、一人にて天皇を奪ひて、勤王の旗を擧げんとせしむるを、驚き懼るゝさま。
 〔愬愬〕サクサク、驚き懼るゝさま。
 〔片言〕一ことば。十字の詩句を指す。
 〔南風不競〕南方の樂の音の微なること、芳野朝廷の勢力の微なるをいふ。左傳にある語。

〔至誠感神〕至れるまごころは、神の心をうごかす。
 〔高閣〕小城郡岩松村見瀧寺なる大悲堂をいふ。大悲尊、即觀世音菩薩を安置せり。堂の側に、清水瀑あり。瀑の下に、節士倉永清雄碑と、孝子下村芳充碑と、此の詩を彫りたるものあり。
 〔文久〕孝明天皇の時の年號。紀元は、元年。
 〔晴霓〕晴天のにし。瀑布。
 〔阿爺〕ナクヤ。父下村芳實氏。
 〔舌疽〕今いふ舌痛。

同 上

天日西傾、茫無光。
 何人執戈、倣魯陽。
 隻手欲遮、虞淵影。
 備後男子、字三郎。
 幽雲帶憤、天色黑。
 深夜愬愬、尾豺狼。
 樹上片言、動天地。
 遂使群國、知勤王。
 休言南風、再不競。
 芳烈千載、與櫻香。

至誠感神

佐野雪津常民

巍然高閣、聳斷崖。
 水清山秀、地勢宜。
 文久紀元、冬十月。
 我來、虔肅拜大悲。
 傍有瀑布、從天落。
 絕壁千丈、懸晴霓。
 餘流激巖、亂四迸。
 碎作珠玉、萬顆飛。
 憶昔阿爺、患舌疽。
 飲食沮礙、日億衰。

〔二豎〕疾をいふ。景公の夢に、疾が二人の鬚子となりて、左語りあひしこと、左傳に見ゆ。

〔鍼〕金屬の針。

〔石〕石の針。

伯兄、長男。作者佐野伯は、芳贊氏の末子なれば、芳充氏を伯兄といはる。

〔度支〕會計。閑叟公襲封の初、國用甚困難する時なれば、艱難際さいへり。

〔靈威〕觀世音のりやく。

無^レ奈^ス二豎^ニ恣^ニ猖^ニ獞^ト。

藥餌鍼砭無^キ可^キ醫^ス。

伯兄時年二十七。

嘗^メ藥^ヲ護^シ床^ヲ不^レ告^ゲ疲^ル。

儉^ニ閑^ニ幾^ニ詣^ニ大^ニ悲^ニ閣^ト。

閣^ニ下^リ泣^キ拜^シ一^ニ念^ニ祈^ル。

方^ニ值^フ度^ヲ支^テ艱^ニ難^ニ際^ト。

阿^ノ爺^ハ不^レ在^ラ國^ニ用^ヒ虧^ケ。

兒^ガ身^ハ今^ニ死^シ固^シ無^シ害^シ。

願^フ救^ヒ父^ノ命^ヲ代^リ以^テ兒^ト。

裸^ニ身^ニ兀^ニ立^ス飛^ビ瀑^ヲ下^リ。

斷^チ食^ヲ忍^ビ凍^チ仰^グ靈^ノ威^ヲ。

誠^ニ心^ニ到^リ處^ニ果^シ無^シ應^シ。

兄^ハ斃^レ父^ノ瘞^ニ事^ハ亦^モ奇^{ナリ}。

當^レ時^ニ此^ノ事^ハ無^シ人^ノ識^ム。

歿^後唯^ニ有^リ阿^ノ嬢^ヲ知^ル。

阿^ノ嬢^ハ語^リ我^ニ以^テ顛^ニ末^ト。

絮^ハ絮^ト未^ダ畢^ラ涙^ハ先^ニ隨^フ。

因^ッ想^フ倉^ノ永^ニ節^ノ士^ノ事^ト。

芳^ノ名^ハ永^ニ傳^ハ一^ノ片^ノ碑^ト。

代^リ君^ノ代^リ父^ノ跡^ヲ雖^モ異^{ナリ}。

忠^ニ孝^ヲ致^シ身^ヲ本^ト同^シ歸^ス。

屈^ス指^ヲ匆^ク匆^ク三^十歲^ト。

爺^ノ嬢^ハ相^シ繼^シ就^リ泉^ノ臺^ト。

〔節士〕名は、清雄。老徳公重患にて、醫巫施術に苦める時、唐の鍾植の玄宗に於ける事に感じて、斷食し、大悲閣に詣り、公の平癒を祈り、雪中寒瀑の下に立ち、凍死せり。さて、公の疾癒はたり。其年の死せるは、元文七年、正月二十八日なり。

〔泉臺〕黄泉の下の家。
歿せられしをいふ。

嗚呼逝者不復返。
獨對飛瀑涕淚垂。

〔築〕川瀬に、杭をう
ち列べて、水をせき、
一處を空にし、簀に
承けて、魚を捕るも
の。上りやな、下り
やななどあり。

和歌

都人來なる十可亭に、一夜ねて。

閑叟公

よもすがら、築瀬の音の、高ければ、

旅ならねごも、ゆめもむすばず。

江戸の館にまかりける折、道を

〔世を捨つる身〕僧を
いふ。西行などの如
く思ふな意。

〔網代〕あじろ。冬日、
川瀬に、数多の杭を、
水上廣く、下狭く、
うち列ね、その杭に
ぬきを入れた、狭き口
に、簀をあげ、狭き口
に、魚を捕るもの。さて、
篝火を焚き、守り、
て、それを留る魚を
捕る。もる。守る。

〔若菜〕正月七日、野
へ澤へに出でて、七
種の若菜を摘むを
いふ。但、古くは、七
日にかぎらず。

〔鞆中〕旅中に同じ。

まげて、芳野へ花見に物せしこ

き。

雲叟公

世をすつる、身ごな思ひそ。山櫻、

はなゆるゑ入りし、みよしの、奥。

雨中網代

鍋嶋敬文

篝火の、影うちしめり、降る雨に、

ぬれても人の、あじろもるらむ。

名處若菜

富本梅坡

春日野は、けふを待ち得て、皆人に、

わかな摘めこや、雪のきゆらむ。

鞆中夢

永淵有武

〔ふしみ〕伏見と臥身
と言ひかく。伏見
山城の地名。

〔住吉〕攝津。

ゆくもうし。一夜ふしみの假枕、

今朝はみやこのゆめに別れて、

岸頭千鳥 堤 範房

住吉の、きしの松風吹きたえて、

身にしむばかり千鳥なくなり。

重くわづらひて、いまくこな

りけるころ。 峰 矩當

書捨て、身は消えにしを空形うたかたの、

あはれとも見よ。みづくきのあと、

祝 今泉千春

君が代は、斧の柄くちし、仙人の、

千たびかへらむ、時もかはらじ。

〔空形〕うたかた。水
泡。はかなげなるに
いふ。

〔水莖の跡〕筆の跡。

〔斧の柄朽つ〕晋王質、
山に入りて樵せしに、
童子の碁をうちぬた
るを、傍にて見てゐた
たるが、一局終りた
るに、斧の柄をもち、
ちたりし斧の柄朽ち、
家に歸れば、百年を
経たりきといふこと
あり。

〔佛狼察〕フランス。

佛狼察の軍船、長崎の湊に來り
し時、長刀岩の陣にありて。

羽室貞風

松が根に、鎧の袖を、かたしきて、

いく夜か見つる。なみの上の月、

遊絲

岡本維鳩

〔遊絲〕いさゆふ。春のどかなる日、水蒸氣の露の如くなるが、空氣の波動によりて、

絲のひらくする如くに見ゆるもの。

行けば、かつ遠ざかりつゝ、武藏野の、
はてなきそらに、あそぶいさゆふ。

幽棲秋來

副島昭賢

八重葎、しげれる門は、道もなし。

いかに分けてか、秋の來つらむ。

孔子

南里有隣

〔くし〕櫛を、孔子〔クシ〕に言ひ、かけたる趣向なり。

〔足柄關〕相模。

黒髪のみだれし道は、なかりけり。

一たびくしの、ごきわけしより、

關路花

寶珠庵梁山

越えて行く、末も忘れて、暮るゝまで、

はなにやすらふ。あしがらのせき、

待郭公

山領利昌

やまちかき、音羽のさことも、郭公、

またれてきくは、初音なりけり。

千栗神社

同上

宮柱、ふごしきたてゝ、千歳經し、

神のめぐみに、くにろさかゆく。

述懐

野口喬樹

〔音羽山〕山城。

〔千栗神社〕三養基郡北茂安村千栗山上に在り。應神天皇を祀り、仲哀天皇、神功皇后を配祀せり。

詞。〔あしひきの〕山の枕

子を思ふ、親の心を、子のもたば、

その親いかに、うれしからまし。

今泉千秋

足引ひきの、山には深く、すまねごも、

うき世に遠き、わがこゝろかな。

詠史

古川松根

新羅三郎義光足柄山
にて、豊原時秋に、
室の祕曲大食入調を
傳へたる事を、詠み
たるなり。

心ありて、君つたへずは、足柄の、

みねの松かぜ、吹きや絶えなむ。

辭世

同上

君一人のこしまつりて、ふる里へ、

かへる心の、あらばこそあらめ。

今はこて、いそぐや露の、たび衣、

たちたくるべき、吾身ならねば。

今泉蟹守

梅のやま、月たちのぼれ。河上の、
やなせに落つる、鮎のかず見む。

豫章

外集上

佐賀市中等學校 合選

藤井 錢鏗卿 點註

七言絶句

言志

細川常久頼之

人生五十愧無功。花木春過夏巳中。

この詩、頼之譏せら
れて、職を去り、讚
岐に之くまきの作。
〔蒼蠅〕群小人に喩ふ。

〔禪榻〕禪僧の處を靜
に、坐するゆか。ふる
時、塵俗の境を離れ
て、靜に心身を養は
れむといふ意。

(三) 寺の小僧は、我
が武力にてこの國を
取り、今はこの國を
の主たることを知ら
ず、れんごろに、知ら
なたであるを尋れた
りの意。

この詩、越後越中能
登三國を得て、得意
なる状を見るに足れ
り。
(二) いく列かの過雁が
ある、三更の月のよ
き時に。

(四) 家郷のものは、我
が遠征してゐるのを
思ひて、早く歸れば
よいと思ふならば思
へ、このよき景色を
見すて、歸らる、も
のに非ずの意。遮莫、
任する。ま、よ。

(二) 眼つききびしくて、
きらきら光ある意。
〔畫麒麟〕漢宣帝の時、
功臣十一人を麒麟閣
に畫かしめき。

滿室、蒼蠅掃難去、起尋禪榻臥清風。

偶作 武田機山晴信

鑿殺江南十萬兵、腰間一劍血猶腥。

豎僧不識山川主、向我慇懃問姓名。

九月十三夜陣中作

上杉霜臺輝虎

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更。

越山併得能州景、遮莫家郷憶遠征。

題肖像 新井白石君美

蒼顏如鐵鬢如銀、紫石稜稜電射人。

五尺小身渾是膽、明時何用畫麒麟。

寄題豐公故墟 荻生徂徠雙松

〔絶海〕海を渡る。この句、昔の勢の盛なりしをいふ。〔震〕震懼、おそれさす。〔長柴荆〕雜木いばらなど生れ、あればは昔のさまなきをいふ。〔叱咤〕大聲にて軍を指揮する聲。この詩、大の字、國體に關すれば、有の字に改むべし。されの字、詩としては、大の字、力あれば、姑、原作のまゝにす。〔金龍山〕眞乳山の一名。隅田川の西岸にあり。〔下二州〕隅田川は、武藏下總兩國の間を流る。兩岸より吹き来る秋風をわけて、一度に二州を下るの意。

〔一〕帆に風をうけ、浪をきりて還るの意。〔三十六灘〕灘は、瀬。瀬戸内海のせの多きをいふ。この詩、或は、碧海遙迴を、玄海潮通に作る。勝れるに似たり。〔絲竹〕琴三味線笛など。〔空明〕月在水中謂之空明。月影の映りたる海。〔浪不動〕海不揚波など、太平なるをいふ意を伏す。〔秋高〕秋高馬肥など、武備用ゐるに足る意を伏す。〔一百二〕覺島に、百二の都城といひ、城壘の如きもの百二ありといふ。史記の百二の意とは、異なり。

絶海樓船震大明。

寧知此地長柴荆。

千山風雨時時惡。

猶作當年叱咤聲。

夜下墨水。

服部南郭元喬

金龍山畔江月浮。

江搖月湧金龍流。

扁舟不往天如水。

兩岸秋風下二州。

赤馬關

伊形靈雨淳

長風破浪一帆還。

碧海遙迴赤馬關。

三十六灘行欲盡。

天邊初見鎮西山。

覺島

龜井南冥魯

誰家絲竹散空明。

孤客憑樓夢後情。

皎月南溟浪不動。

秋高一百二都城。

冬夜讀書

菅茶山晉帥

〔山堂〕夕陽黃葉村舍。
 〔沈沈〕夜深きさま。
 〔三〕靜肅端坐して、經書の疑義を考ふ。
 〔四〕一本の焰の夜深けて青白くなりたる燈の下に萬古に亘つて貫ける道義の心にて、經義を自得するの意。
 〔海甸〕王城を去る五百里の地を甸といふ。
 〔陰風〕陰氣なる風。
 〔兵亂〕兵亂。
 〔史編〕歴史。
 〔餘瀝〕忠義なる血ののこりのこる。
 〔兒曹〕こどもたち。
 〔正行正時及正儀等〕正行正時及正儀等。
 〔泉岳寺〕東京芝高輪に在りて、赤穂義士四十七人の墓あり。

雪擁^{シテ}山堂^ヲ樹影深^ク。 檐鈴不動^カ夜沈沈。

閑收^{メテ}亂帙^ヲ思疑義^ヲ。 一穗青燈萬古心。

楠公別^ル子圖^ニ 賴 山陽襄

海甸^ヲ陰風草木腥^ク。 史編特筆姓名馨^ク。

滿腔熱血存^シ餘瀝^ヲ。 分^{シテ}與兒曹^ニ灑^{ガシム}賊庭^ニ。

泉岳寺 坂井虎山華

山嶽可^ク崩海可^ク翻^ス。 不^セ消四十七士魂。

墳前滿地草苔濕^ク。 盡^ク是行人流涕痕。

隈川 廣瀨淡窓建

觀音閣上晚雲歸^ル。 忽有^リ鐘聲出^{ツル}翠微^ヲ。

沙際爭^{ウテ}舟人未^ダ渡^ラ。 雙雙白鷺映^{ジテ}江飛^ブ。

桂林莊雜咏示^ス諸生^ニ

〔翠微〕山の半腹。

〔同袍〕毛詩秦風に、豈曰無衣、與子同袍、
 共其禦寒。一著の衣類を共同にする意。親友の詩を見て、往時の學生は、衣食住の狀態、今と異なり、辛苦多かりしを、想像せらる。

〔仁〕心無私事當理曰仁の仁にて、人の正しき道。

〔鐸石〕和氣氏は、垂仁天皇第五皇子鐸石別命の裔。
 〔妖氣〕あしき氣。道鏡を指す。

〔豹死留皮〕豹死留皮、人死留名、梁の王彦章の語。

〔人送迎〕人自送迎の意。この詩同一の雨にても、人の心より、或は花を催す雨とし

同上

休道他郷多苦辛。同袍有友自相親。

柴扉曉出霜如雪。君汲川流我拾薪。

贈正一位和氣清麻呂公贊

梁川星巖孟緯

人自非剛焉得仁。或爲義士或忠臣。

請看鐸石裔孫在。掃蕩妖氛清紫宸。

大楠公 同上

豹死留皮豈偶然。湊川遺跡水連天。

人生有限名無竭。楠氏精忠萬古傳。

和春盡雨窓 賴 鴨厓醇

春自往來人送迎。愛憎何事別陰晴。

て喜び、或は花を落す雨として憂ふるは、迷へることなるをいふ。

〔松前〕渡島。

〔寒栢〕寒夜に非常を警めてうちゆく拍子木の聲。松前より、樺太地方まで、六町一里にて、二千三百里ほどあり。四漢の馬援、南征して交趾の界に至り、銅柱を建て、漢の極界としたる如く、北極邊まで探検して、そこに、日本領地の標柱を建てむと思ふ。〔郷關〕故郷の出口の門。

落花雨是催花雨。一樣檐聲前後情。

松前作 長尾秋水景翰

海城寒栢月生潮。波際連檣影動搖。

從此二千三百里。北辰直下建銅標。

欲出郷題壁 僧 清狂月性

男兒立志出郷關。學若不成死不還。

埋骨何期墳墓地。人間到處有青山。

曾我兄弟復讐圖

齋藤拙堂正謙

求仇虎穴不辭深。義勇千秋震士林。

死孝死忠同一理。二蘇何讓二楠心。

風雨望寧樂 藤井竹外啓

〔寧樂〕奈良。

〔虎穴〕不入虎穴、不得虎子。後漢班超の語。危き處をいふ。〔士林〕武士社會。〔二蘇〕曾我十郎祐成、五郎時致兄弟。〔二楠〕正成正季。

〔墳墓地〕先祖代々墓のある土地。〔青山〕骨を埋むべき地。この詩、或は松村文二の作なりともいへり。

〔浮圖〕塔。
〔伽藍〕寺。
〔九衢〕京城九條のま
ち。舊都にて、その
跡あり。
〔黑風白雨〕夕だちの
如きはげしき風雨。

〔古陵〕後醍醐天皇塔
尾陵。如意輪堂の東
にあり。
〔山寺〕如意輪寺。
〔眉雪〕まゆの雪の如
く白き。

半空湧出、兩浮圖。

更有伽藍、俯九衢。

十二帝陵、低不見。

黑風白雨、滿南都。

芳野

同上

古陵松柏、吼天飈。

山寺尋春、春寂寥。

眉雪老僧、時輟帚。

落花深處、說南朝。

偶成

木戸松菊、孝允

才子恃才、愚守愚。

少年才子、不如愚。

請看他日、業成後。

才子不才、愚不愚。

西鄉南洲、隆盛

才子元來、多過事。

議論畢竟、世無功。

誰知默默、不言裡。

山是青青、花是紅。

同上

〔和聖東〕George Washington. 北米合衆國初代の大統領。
 〔奈波翁〕Napoleon Bonaparte. 佛蘭西帝
 奈波翁第一世。
 (四)古今の盛衰興亡、ありありと眼前に見えて、盛なる者も衰へ、衰へたる者も盛になる時あれば、好き機會を得て、和奈二氏の如く、文勳武功を建てんと思ふさふ意。
 〔那以也哥羅〕Niagara. 米國ニウーヨーク州。
 〔崔嵬〕山の高く大なる。
 (四)瀑布に月の映るをいふ。

〔皜皜〕雲のさまなれど、霞たなびき長閑なるさま。
 (四)牛飼小童きて、侮るべきに非ず、豊公の如き者が、此の輩の中より出づるかも知れぬ。

建^ツ業^ヲ唯^ニ期^ス和^ニ聖^ト東^ニ。 戰^ニ功^ヲ獨^ニ願^フ奈^ニ波^ト翁^ト。
 半^ニ宵^ヲ提^テ劍^ヲ望^ム寒^ニ月^ニ。 今^ニ古^ト興^ニ亡^ト兩^ノ眼^ニ中^ニ。

觀^ル那^ニ以^テ也^ヲ哥^ニ羅^ト瀑^ニ布^ト。

成^ニ島^ト柳^ト北^ニ弘^ト

客^ニ夢^ヲ驚^キ醒^ム枕^上雷^ニ。 起^ツ攀^テ老^ニ樹^ヲ陟^ル崔^ニ嵬^ト。
 夜^ニ深^ニ一^ニ望^ム乾^ニ坤^ト白^ク。 萬^丈珠^ニ簾^ヲ捲^キ月^ヲ來^ル。

偶^ニ成^ル

松^ニ平^ト春^ニ嶽^ト慶^ニ永^ト

眼^ニ見^ル年^々開^ニ化^ス新^ク。 研^キ才^ヲ磨^キ智^ヲ競^ツ謀^ル身^ヲ。
 翻^ッ愁^ヲ習^フ俗^ヲ流^ル浮^ク薄^ク。 能^ク守^ル忠^ニ誠^ヲ有^ル幾^ク人^ト。

牧^ニ童^ト牛^ノ背^ノ圖^ト

森^ニ春^ニ濤^ト魯^ニ直^ト

中^ニ興^ス霸^ニ略^ヲ說^フ豊^ニ公^ト。 公^モ亦^シ微^ニ時^ヲ是^レ牧^ニ童^ト。
 烟^ニ雨^ヲ滿^ク村^ヲ春^ニ皜^ク皜^ク。 可^ク無^ク牛^ノ背^ノ出^ス英^ニ雄^ト。

〔天墀〕殿階上地也、天子赤墀、なごいへり。紫宸殿の御庭。〔翬〕古の射に巧なりし人。〔梟鷂〕ふくろふ、こび。あじき鳥。清盛を指す。

〔鬼武〕賴朝。〔牛郎〕義經。〔驥尾〕良き馬のあと。よき人のあとにつきて事をする。賴政が高倉宮の令旨を奉じて起りたる後につきて起りたるをいふ。

源三位二首

藤井霽雲行權

應^{シテ}弦^ニ何物墜^{ツル}天墀^ニ。

鳴鏑穿^{ツテ}雲怪鳥悲^ム。

老^{ダイ}翬^ニ他年餘技盡^キ。

不^{メテ}留^ニ一箭射^テ梟鷂^上。

白旗颺起^ス海西風。

討^{シテ}滅^ラ平軍誰奏^{セル}功^ヲ。

鬼武牛郎皆驥尾。

獨推^ス首唱^ハ是斯公^ノ。

讀弘安紀

佐藤牧山楚材

弄^ス筆^ヲ書生多老饜^ハ。

漫^ニ將^{ツテ}莽操^ヲ罵^ル英豪^ヲ。

君看^ム不^レ有^ラ相州氏^ニ。

一怒誰揮^カ日本刀^ヲ。

〔老饜〕老いて食る心深し。〔莽操〕王莽曹操の天下を奪ひたる逆臣。〔英豪〕時宗を指す。〔相州氏〕北條相模守時宗。

乃木石林希典

聞^{キク}道^ヲ九州山水奇^{ナルヲ}。

鐵蹄欲踏^ム上春時^ヲ。

征途若過^シ梅花地^ヲ。

折^リ得^テ齎^シ歸^{ラン}一兩枝^ヲ。

金州城作

同上

〔九州〕赤縣九州。清國。〔上春〕初の春。

山川草木轉荒涼。千里風腥新戰場。
征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

寄家兄言志
廣瀨武夫

勤王大義太分明。報國丹心期七生。
傳家一脈遺風在。盟舉名聲弟與兄。

七言律

漫成二首
蒲生修靜 秀實

丈夫生有四方志。千里劍書何處尋。
身任轉蓬無遠近。思隨流水幾浮沈。
笑看樽酒狂先發。泣讀離騷醉後吟。
唯賴太平恩澤渥。自將章句託青衿。

〔四方志〕歷遊するこ
〔轉蓬〕根より抜けた
る蓬の、風に吹かれ
て、轉げゆくが如き
をいふ。
〔離騷〕楚の屈原の作
れる詩に似たる文。
屈原、讒に遭ひ放た
れて後、至情にたへや
らで、作りしもの。
〔八〕讀書して身を學生
のなかまにたくの意。

〔短褐〕短き毛織りの衣。賤者の服。

〔市塵〕まち。民間。

〔八〕孔子の門人顔回は、一簞食、一瓢飲、在陋巷、不改其樂。さて稱せられたるが、余は、一瓢飲の貧窮なる生活をすれど、顔子の如く賢にはあらず。

〔提封〕領地。〔虎負隅〕虎の後に山を負ひて、心を配るべきことなく強きが如く、要害のよき城なるをいふ。

短褐空過二十年。

悠悠世事謬周旋。

會期大義、驕侯國。

豈意微軀、屬市塵。

求友一鄉、無共語。

讀書千卷、有誰憐。

明時在野、還知分。

瓢飲亦非、顔子賢。

謁加藤公廟

賴山陽

提封當日、關榛蕪。

形勝居然、虎負隅。

〔百雉〕雉は、長さ三丈、高さ一丈の牆。

〔雞林〕朝鮮。雞の縁語にて、雙雞をいふ。

〔惜髯〕東照公に答へて、髯を存するは、戎服して鐵面を著くるに必要なりと、いはれしことあり。

〔眇視跛興〕清正公の利益にて、盲の目ありき、跛の足立つ。

〔遺孤〕秀賴。

〔踏破〕タフハ。破助字、意輕し。踏む。

〔煙〕煙霞。かすみ。山又山を踏み越えて、三石山より杉坂に行きたるをいふ。〔鑿輿〕天皇のみくるま。

熊府、城樓營百雉。

雞林、毛羽捕雙雛。

鐵戈、冒雪纔存指。

銅面、衝風故惜鬚。

眇視、跛興人競禱。

靈威、却不庇遺孤。

題兒島高德題詩櫻樹圖

齋藤監物一德

踏破千山萬岳煙。

鑿輿今日到何邊。

(三) 高德一人にて、
 敵兵の警護せる、危
 険なる、萬死の場に
 入りたるをいふ。
 (七) あひくち刀。
 (回天) 天日の西に傾
 きたるを回すが如く、
 天皇をもこの如くに
 なし奉らんとするを
 いふ。
 (奏九天) 天に奏せさ
 す。天皇に申し上げ
 ます。

鎌倉雜感十二首の一
 にて、大塔宮の事を
 賦したり。
 (陰陰) くらし。
 (虜) 足利氏。
 (秦王) 唐太宗。父高
 祖を佐けて、天下を
 定む。
 (太子) 漢武帝の太子

巫蠱の事にて、據。
 自殺せしが、武帝後
 に其の罪なきを悟り、
 歸來望思臺を作りて、
 哀まれき。
 (骨肉) 親子兄弟の親。
 (九關) 關は宮中の門。
 九重の奥。後醍醐天
 皇を指す。

(虎擲龍拏) コテキリ
 ヨウダ。虎うち龍ひ
 く。はげしき戦闘。
 (五味方) なり敵さな
 りたるも、一時の事
 にて、今は、隔なく
 明月が照してあり。
 (六) 是さし非さするこ

單蓑直入虎狼窟。一七深探鮫鱈淵。

報國丹心嗟獨力。回天事業奈空拳。

數行紅淚兩行字。付與櫻花奏九天。

鎌倉雜感 小野湖山長愿

土室陰陰白日昏。虜庭正氣事堪論。

秦王全定唐家業。漢帝寧知太子寃。

自昔聰明多速禍。于今骨肉有讒言。

忠魂不祭空千古。號泣憑誰愬九關。

過田原坂 宮崎來城繁吉

秋笛翻風三五聲。且喜荒蹊牧童迎。

同尋虎擲龍拏跡。指問殘山剩水名。

恩怨一時明月在。是非如夢暮雲行。

さも、今は夢の如く
消れて、雲のゆくを
見るのみ。
七(八)南州翁歿せられ
てより、賢佐もなけ
れば、朝廷の事、憂
慮にたへずの意。

〔正觀〕武光の法諡。

忠良去後無賢佐。紫闕回頭空有情。

七言古

下筑後川過菊池正觀公戰處感
而有作
賴山陽

〔文政〕仁孝天皇の時
の年號。

〔正平〕後村上天皇の
時の年號。癸亥は、
其十四年。
〔鷗張〕鷗は、梟の屬。
惡鳥。取鳥子而食者。
暴威を逞しくするに
いふ。
〔七道〕日本國中。
〔豺狼〕足利を指す。
〔勤王諸將〕楠新田、
名相、北畠、結城諸
公。
〔遺詔〕延元四年の詔。
二十年後の今日も忘
れず。
〔龍種〕天皇の種族。

文政之元十一月。吾下筑水儼舟筏。
水流如箭萬雷吼。過之使人豎毛髮。
居民何記正平際。行客長思己亥歲。
當時國賊擅鷗張。七道望風助豺狼。
勤王諸將前後沒。西陲僅存臣武光。
遺詔哀痛猶在耳。擁護龍種同生死。

懷良親王。興國元年三月、征西將軍として西下せられ、武光駕を迎へ、府を八代に開く。
〔代衛枚〕枚は、箸に似て、夜襲などに兵の口にくはへさせ、言ふを防ぐもの。河水の音高くて、枚を用ゐざれば、敵に知られぬ様に、行かれば、たるをいふ。
〔如蝟〕は、りれずみの毛の如く、矢を多く受けたり。
〔奔湍〕は、やせ。
〔四世〕武時―武重
武敏
武光
〔武政〕武朝
〔逡巡〕九州の者皆畏れて、征西府に敵た

大舉來、犯彼何人。誓剪滅之、報天子。
 河亂軍聲、代銜枚。刀戟相摩、八千師。
 馬傷胄破、氣益奮。斬敵取、胄奪馬騎。
 被箭如蝟、目皆裂。六萬賊軍、終挫折。
 歸來河水、笑洗刀。血迸奔湍、噴紅雪。
 四世全節、誰儔侶。九國逡巡、征西府。

ふ者なし。
〔棟蓐〕毛詩小雅、棠棣之華、鄂不韡韡、棠凡今之人、莫若兄弟。こあるより、兄弟をいふ。こ、兄弟を足利氏に從はぬこと。
〔邵明使〕明史に、明太祖洪武二年、遣行人楊載、詔諭其國。日本王良懷、不奉命。あるもの。正平廿四年の事。
〔恭獻〕明主、足利義満を、恭獻王に封ず。
〔少貳〕賴尙。
〔大友〕氏時。
〔狗鼠〕順逆の理を知らぬ、賤むべきもの。〔嚮南雲〕肥後の山、が南にある雲に向ふか、と見ゆ。南朝に志を寄するをいふ。臣。〔激餘怒〕尙、當時の

棟蓐未肯向北風。殉國劍傳自乃父。
 嘗邵明使壯本朝。豈與恭獻同日語。
 丈夫要貴知順逆。少貳大友何狗鼠。
 河流滔滔去不還。遙望肥嶺嚮南雲。
 千載姦黨骨亦朽。獨有苦節傳芳芬。
 聊弔鬼雄歌長句。猶覺河聲激餘怒。

事を忘れず、正觀公の餘れる憤怒をあらはしてゐるかと思はる。

〔三決死〕英人を襲殺せんとせし時、烈公に襲封せさせんとせし時、幕府烈公を疑ひ、参府を命じたるに隨行せし時。

〔刀水〕利根川。

〔邦家隆替〕水戸家の盛衰。

〔嫖姚定遠〕前漢嫖姚將軍霍去病、後漢定遠侯班超の如く、外征に従事して、武功を建つることは、望まれません。

〔丘明馬遷〕魯の左丘明盲となりて後、春秋國語を著し、前漢の司馬遷宮刑を受けし後、史記を著せり。

述懷

藤田東湖 彪

三決死矣而不死。二十五回渡刀水。

五乞閑地不得閑。三十九年七處徒。

邦家隆替非偶然。人生得失豈徒爾。

自驚塵垢盈皮膚。獨餘忠義填骨髓。

嫖姚定遠不可期。丘明馬遷空自企。

我も、苦痛の中に、歴史を著さんせしかども、不才にして成功せずの意。

苟明大義正人心。皇道奚患不興起。

〔檻致〕罪人を載する駕にて、護送せらる。

被檻致過刀根河。

雲井龍雄

〔紳紱〕束帯の時の大帶と、膝かけ即平緒とのこと。公卿高官の人。

欲回狂瀾濟一世。道之窮通未肯計。

直氣吐來震紫宸。滿眼紳紱是薜芥。

〔孤臣〕たすけなきひ
 八他人の我が意思の
 自由を妨ぐるをゆる
 さず。掣肘、さしづ
 し干渉する意。檀弓
 に出づ。
 〔東寧河〕利根川。

〔水東逝〕思ふ所を實
 現する能はずして、
 空しく過ぐる意。
 末二句、たこひ、山
 が漸低くなりて、
 石の如く、河が漸細
 くなりて、帯の如く
 なり、世の中、我が
 變化すとも、我が志
 はかはらすの意。
 〔替〕廢也。すたる。
 かはるをいふ。

天日不照孤臣心。
 枉被浮雲遮且蔽。
 欲死則死生則生。
 我肘豈容他人掣。
 檻車夕過東寧河。
 目擊湖山淚沾袂。
 回顧遭逢夢耶眞。
 壯圖唯有水東逝。
 嗚呼縱令此山如礪、
 此河如帶。區區
 之志亦能替。

〔二美〕芳根忠臣。

〔每遇東風〕春になり
 て、櫻の開く時ごこ
 に、櫻のつも。
 〔戒剪拜〕きりこるべ
 べからず、かがめまぐ
 べからず、戒む。
 〔當年〕元祿十四年、
 十二月十四日夜、討
 入。その日の雪、十
 五日朝までも残りて
 あればいふ。
 〔鞞〕くつ。

大石櫻
 驚津毅堂宣光
 人是武士花是櫻。
 此花此人洵相當。
 芳根託在忠臣宅。
 并得二美名聲揚。
 其樹雖存其人歿。
 每遇東風思遺烈。
 國民敬愛戒剪拜。
 爛然仍舊花如雪。
 想見當年襲仇家。
 道途一白欲沒鞞。

〔血骸〕血のしたゝる頭骨。

この詩、明治十年西郷の亂の時の事を賦したるなり。

〔火國〕肥前肥後は、古の火の國。

〔渠〕かれ。賤めいふ。薩軍を指す。

〔魯般〕魯の公輸般、楚の爲に、雲梯を造る。墨子に出づ。

血骸在手、紅滴滴。雪觸刀尖、碎如花。

熊本城 平野五岳聞慧

四面皆賊、簇似雲。城在雲中、級級分。

滿目今日、眞火國。市廛村落、一時焚。

城兵如魚、在釜中。城將心居、泰山安。

破裂丸飛、烈焰迸。雲梯笑渠、學魯般。

〔田單〕齊の將。即墨城に在りて、火牛の策を用ゐ、燕軍を取れり。

〔賴〕サイハヒニ。

〔欲菜〕野菜のみ食して、元氣なき顔色を、菜色といふ。

〔都督〕總督府を赤馬關に置かる。

〔驀地〕まつしぐらに。〔倒瀾〕たふれたる大なみ。

忽使萬雷發、自地。火牛何必、倣田單。

六十日間、無虛日。攻守一日、幾艱難。

軍糧如山、山亦盡。賴有我兵、力未殫。

雖力未殫、色欲菜。千竈煙絕、兵氣酸。

都督大兵、知在近。吶喊聲隔、一山聞。

城兵驀地、出擊賊。賊軍崩去、似倒瀾。

〔鬼將軍〕加藤清正。

〔一〕死ぬるも、生くるも、天より命ぜられたるものにて、人の自由にせらるゝものに非ずといふことは、言ふに足らず。
〔鞠躬〕身をかがめつゝ、しみて。
〔難〕國のわざはひ。

嗚呼日本國中已無城。 唯有此城遮
賊氛。 守城者誰谷干城。 築城者是
當年鬼將軍。

正氣歌

廣瀨武夫

死生有命不足論。 鞠躬唯應酬至尊。
奮躍赴難不辭死。 從容就義日本魂。

一世義烈赤穗里。 三代忠勇楠子門。

憂憤投身薩摩海。 慷慨就刑小塚原。

或爲芳野廟前壁。 遺烈千年見鏃痕。

或爲菅家筑紫月。 同存忠愛不知寧。

可見正氣滿乾坤。 一氣磅礴神州存。

嗚呼正氣畢竟在誠字。 嗷嗷何必要。

〔投身〕西郷南洲、僧月照。
〔小塚原〕東京にあり。
〔就刑〕頼鴨厓、橋本景岳等。
〔芳野廟前壁〕小楠公梓弓の歌。

〔寧〕寧處。安寧にして居る。

〔磅礴〕廣被也。充塞也。ひろがりみちて。

(二) まちがひて、太平の時に生れあひ、其の身の用ゐられずして、窮したるを悲む。通の字、帶言。〔落魄〕貧無家業。〔風塵中〕世間の俗の中。〔圖南大鵬〕莊子に、鵬之背、不知其幾千里也、是鳥也、海運則將徙於南冥也。又云、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、搏扶搖而上。

者九萬里と。こゝ、大志を抱きて、之を實現せんと思へども、機會を得ずといふ意。

〔颶〕バイ。又、颶母、孟婆など用ゐる。海之災風也とあり。こゝ、來り、颶風筑海に吹きて、眞黒なる如く、連りて、古軍の艦を連れて來るさまをいふ。颶の字、多く颶に書けり。今、樂府の原本に從ひ、颶の字に改む。〔趙家老寡婦〕宋は、趙匡胤の後にて趙氏老寡婦。謝太后を指す。懿皇、二年、孝恭に降る。〔男兒國〕樂府注に、本邦古名、嶽虛洲、嶽虛、國語男兒也とあり。

多言^ナ。誠哉^{ナル}誠哉^{ナル}斃^レ不^レ已^マ。七生^セ人間^ニ報^ゼ國恩^ニ。

贈^ル石井補天^ニ 宮崎來城

汝^ハ是^レ亂世之英雄。誤^ッ生^レ清時^ニ悲^ム窮通^ヲ。

一卷兵書三尺劍。十年落魄風塵中。

吁噫圖南大鵬翼^{ドモ}雖^{ナリト}健^ク。九萬之程海

不^レ運^セ。

樂府

蒙古來

賴山陽

筑海^ノ颶風^{バイ}連^ッ天^ニ黑^ク。蔽^ウ海^ヲ而來^ル者^ハ何^レ賊^ゾ。

蒙古來^ル。來自^ル北^ニ。東西次第^ニ期^ス吞食^ヲ。

れど、破慮、たのころ
 は、自擬るの義。男兒
 は、をのこ。假字異な
 り。されど、本文は、
 猶、男兒の義として
 用ゐたり。
 「相模太郎」北條相模
 守時宗、幼字太郎。
 「膽如塞」きもだま大
 きく、意氣の盛なる
 をいふ。
 「如山」不動如山なご
 いひて、「旦命令した
 ることは、嚴重にし
 てかはらざるをいふ。
 結二句残念なること
 なり。東風が一かり
 にかりたて、大濤に
 わたし、海に入れて、
 蒙古賊の血を、我が
 日本刀にぬらせざり
 しはの意。即、日本人
 の武力、日本刀のき
 れあちを知らせざり
 しは、残念なりの意。

嚇^シ得^テ趙家、老寡婦^ヲ。持^シ此^ヲ來、擬^ス男兒國。
 相模太郎膽如、虜^ヲ。防海、將士人各力^ム。
 蒙古來。吾不^レ怖^レ。吾怖^ル關東、令^キ如山^ニ。
 直前斫^ツ賊、不^レ許^サ願^ム。倒^シ吾^ガ檣^ヲ。登^リ虜艦^ニ。
 擒^シ虜將^ヲ。吾^ガ軍喊^ス。可^シ恨^ム東風一驅^シ附^シ。
 大濤^ニ。不^レ使^ハ羶^ル血盡膏^ニ日本刀^ニ。

男にして、徒に世を
 過すべきにあらず。
 さるに、かく病みて
 は、何の功を立つる
 ことも、心に叶はず
 して、空しく世を過
 すべきこと、思ふが
 口をしきことその意。

「あれ」吾の古言。
 「しるしあり」かひあ
 りて、よるこばし。

和歌

沈痾之時歌

山上憶良

男^ヲやも、空しかるべき。萬代に、

語りつくべき、名はたゝずして、

應詔歌

海犬養岡麿

み民あれ、生けるしるしあり。天地の、

〔逢へらく〕逢へるの
延音〕あひたること
をの意

〔しこ〕醜の男など、
自ら卑下して言ふ。
〔御楯〕敵軍の矢先の
楯なる。

〔劔太刀〕枕詞。さぐ
にかゝる。
〔いにしへゆ〕古より。

榮ゆるさきに、逢へらくたもへば、

イマツリベノ
今奉部與曾布

今日よりは、かへりみなくて、大君の、

しこの御楯こ、いでたつわれは。

サトスヤカラニ
喩族歌

大伴家持

劔たち、いよゝさぐべし。いにしへゆ、

さやけく負ひて、きにしその名を、

蓮の露を見てよめる

僧正遍昭

蓮葉の、にごりにしまぬ、心もて、

なにかは露を、玉とあざむく。

寛平の御時、せられける菊合に、

〔寛平〕宇多天皇。

〔菊合〕菊の花を、左
右の數番に分ちて、
優劣を判する遊。そ
れには、必、歌をも
そへたるもの。〔洲濱〕
洲の濱への凹
凸ある如き形に作り
たる臺などないふ。

〔吹上濱〕紀伊。

洲濱をつくりて、菊の花うゑた
りけるに、くはへたりける歌。吹
上の濱のかたに、菊うゑたりけ
るをよめる。 菅原道眞

秋風の、ふきあげにたてる、白菊は、
花かあらぬか。なみのよするか。

素性法師

底ひなき、淵やはさわぐ。山川の、
あさき瀬にこそ、あだ浪はたて。

題しらず 讀人しらず

緑なる、ひこつ草ころ、春は見し。

秋はいろくの、花にぞありける。

〔底ひなき〕そきなき
さ同じ。深さの知ら
れぬ。

〔まだしき〕まだその
時に至らぬ。早き。

題しらず
伊勢

五月來ば、鳴きもふりなむ。郭公、

まだしき程の、聲を聞かばや。

花のちるをよめる

紀友則

ひさかたの、光のごけき、春の日に、

〔ひさかたの〕枕詞。

しづこゝろなく、花の散るらむ。

年のはてによめる

春道列樹

昨日こいひ、今日こくらして、飛鳥川、

ながれてはやき、月日なりけり。

月の朧もしろかりける夜、あか

〔飛鳥川〕大和。明日
に言ひかく。

(な)感動辭。

つきがたによめる。

清原深養父

夏の夜は、まだ宵ながら、あけぬるを。

雲のいつこに、つきやごるらむ。

題しらず

曾根好忠

朝ぼらけ、萩のうは葉の、露見れば、

はや肌さむし。あきのはつかぜ、

落葉如^レ雨、こいふことをよめる

源 頼實

木の葉ちる、宿は聞きわく、方りなき。

時雨する夜も、しぐれせぬ夜も、

堀河院に、百首の歌奉りける時。

〔ささ浪や〕滋賀の枕詞。
〔滋賀の都〕天智天皇上に出づ。
〔を〕感動詞。

源 師頼

草深み、あさ茅まじりの、沼みづに、
ほたる飛びかふ。なつのゆふ暮、
故郷、花こいへる心を、よみ侍り
ける。
平 忠度

ささ浪や、滋賀の都は、荒れにしを。

〔ながら〕昔のまゝの意。さて、長等山に言ひかく。

〔なご〕名臭。攝津。

むかしながらの、山ざくらかな。
晚霞こいふことを

藤原實定

なごの海の、霞の間より、眺むれば、
入日をあらふ。たきつしらなみ、

西行法師

〔鳴たつ澤〕古跡、相模にあり。

心なき身にもあはれは、知られけり。

鳴たつさはの、あきのゆふぐれ、

題しらず 源 實朝

武士の、矢なみつくらふ、こての上に、

あられたばしる。那須のこの原、

荒磯に浪のよるを見てよめる

〔那須〕下野。

〔さざろ〕もの、轟き響く音にいふ。ざんくさ音して。

同 上

大海の、磯もさざろに、よる浪の、

われて碎けて、さけて散るかも。

ひこり懐をのべ侍りける

同 上

山は裂け、海はあせなむ、世なりとも、

〔元弘〕後醍醐天皇。

君に二ごゝろ、われあらめやも。

題しらず

藤原俊成女

吹き迷ふ、雲ゐをわたる、はつ雁の、
つばさにならす。四方の秋かぜ、

元弘元年、八月、俄かに、比叡山に
行幸なりぬこて、彼の山に登り

〔有あけ〕十五日より
後の暁まで残りてあ
る月。

たりけるに、湖上の有明、ここに
たもしく侍りければ。

藤原師賢

思ふここ、なくてう見まし。ほのぐゝこ、
有あけの月の、滋賀のうらなみ、
同じ頃、武藏の國へうちこえて、

こてさし原さいふ所にたりの
て、手分なごし侍りし時、いさみ
あるべきよし、つはものごもに、
めし仰せ侍りしついでに、思ひ
つゞけ侍りし。宗良親王
君のため、世のため何か、惜しからむ。

〔あだに〕むなしく。

すてゝかひある、いのちなりせば、
梵網經、序、莫_レ以_テ空_ヲ過_ル、徒_ニ設_{ナシ}疲勞_ヲ後
代深_ク悔_ム。慶政上人
明日よりは、あだに月日を送らじこ、
思ひしかごも、またくらしつゝ。

頓阿法師

月宿る、澤田のたもに、ふす嶋の、
氷よりたつ。あけがたのそら、

熊澤了介

うき事の、なほ此の上に、積れかし。
かぎりある身の、ちからためさむ。

春雨

下河邊長流

〔朝け〕朝あけ。

曇日の、目にこそ見えね。春雨の、
ふるか朝けの、風のつゆけき。

荷田春満

身を守る、心の關し、まさしくば、

世にまが事の、いかゞいでこむ。

同上

〔まが〕禍。

〔唐鳥のあこ〕昔、蒼
嶺、鳥の跡を見て、蒼
文字を造りし事、傳
へられたり。即、漢傳
文字にて書きたる書
籍。

ふみ分わきよ。大和にはあらぬ、唐鳥の、
あこを見るのみ、人のみちかは。

荷田在滿

いちじろく、夏は來にけり。山の端も、
ゆふあるくもに、しろがさねして、

花の歌こて

加茂眞淵

〔にほひ〕うるはしき
意。香にはあらず。

うらくこ、のどけき春の心より、
にほひいでたる、山ざくらばな。

同上

唐土の、人に見せばや。三芳野の、
よしの、山の、やまざくらばな、

同上

（たわに）撓みしわむ
ほごに。

敦島の歌より十年後
の誕辰に、詠まれし
もの。

信濃なる、すがの荒野を、飛ぶ鶯の、

つばさもたわに、吹くあらしかな。

本居宣長

うつくしき、こま唐土の花よりも、

あかぬながめは、さくらなりけり。

同上

をりくに、遊ぶ暇は、ある人の、

いごまなしこて、書讀まぬかな。

桃

原久胤

山賤が、畠うつ野らの、さかひなる、

桃のわかだち、はな咲きにけり。

夜山

橘曙覽

「た、なはる」た、ま
る。かさなる。

影垂るゝ、星にせまりて、薄ぐろき、

いろたゝなはる。たぼろ夜の山、

山中

同上

きこり歌、鳥のさへづり、水の音、

ぬれたる小草、くもかゝるまつ。

梅

上田秋成

野鳥の、羽ぶきの風に、ちらされし、

なごりの枝の、うめかをるなり。

橘 千蔭

千萬の、あたにむかひて、走り猪の、

かへりみせぬを、こゝろこもがな。

松平定信

〔さへ〕恐らくは、す
らの誤傳ならむ。

千鳥さへ、友よびかはし、遊ぶなり。
なごてか人の、ひこりたのしむ。

丹楓溪

同上

〔丹楓溪〕東本願寺枳
殻邸涉成園十三境の

谷水に、瀧のしら絲、いろそへて、
にしきをあらふ、秋のもみぢば。

平田篤胤

生れいでし、身は卑^{ひく}けれご、學には、

千よろづ人の、かみにたゝなむ。

毎朝聞、鶯

香川景樹

朝な朝な、同じところに、聞ゆれご、
あらたまりゆく。うぐひすの聲、

同上

〔浦安き〕國の中安きの意。

群山の、高根高根を、つたひ來て、

富士のすそ野に、かゝる白くも。

幸逢_ニ太平代_ニ 同 上

浦安き、御代にはあひぬ、いざや子ら、

すゞりのうみの、たまひろはなむ。

賀茂祭 橘 守部

〔しがらみ〕柵。水をせかんさて、柵をうちつづけて、横たを木をからみつけたるもの。

飛鳥川、明日さいひては、流しやる、

月日にかくる、しがらみろなき。

熊谷直好

あき山は、小松まじりの、花すゝき、

萩ふちばかますゝむしのこゑ。

漁舟火 同 上

〔あまのいさり火〕海
士の漁火。れふしの
明をさるさてたく火。

横雲の、たなびきあけし、波の上に、

のころもさびし、あまのいさり火、

大田垣蓮月

宿かさぬ、人のつらさを、情にて、

たぼろ月夜つぐよの、はなの下ぶし。

木戸孝允

鳴く蟲を、驚かさじこ、寐やの戸を、

ござさぬまゝに、夜は明けにけり。

井上文雄

朝夕に、倦まず急がず、怠らず、

學のみちは、行くべかりけり。

春月

同上

かすむ夜の、袖さむからぬ、春風に、
たちいでて見れば、月ふけにけり。

秋の歌の中に 正岡常規

寐しづまる、里の燈、みな消えて、

あまのがは白し。竹藪の上に、

陸軍始の行幸を拜みて

落合直文

わが袖に、かよふもかしこ。御車の、

過ぎ行くあこの、はるのはつ風、

同上

緋絨の鎧、をつけて、太刀はきて、

見ばやごうたもふ。山ざくら花、

高崎正風

浮雲のさはればさはるまゝにして、
すむそらたかし。あきの夜のつき、

乃木希典

武士は、たまも黄金も、なにかせむ。
いのちにかへて、名こそ惜しけれ。

豫章

外集下

佐賀市中等學校 合選

藤井 錢鏗卿 點註

七言絶句

黄鶴樓送孟浩然之廣陵

唐李

白 太白 青蓮

〔黄鶴樓〕湖廣武昌城西南隅黄鶴磯上に在り。
〔廣陵〕江南揚州府。〔故人〕友人をいふ。
孟浩然を指す。

〔烟火〕霞たなびき、
花さく。
〔三四〕故人の乗りたる
舟の遠くなる影を見
てゐる中に、その影
も見えず、碧の空も
なくなりて、揚子江
の流さ、一つになり
て見ゆ。

〔廬山〕江西南康府。

〔香爐峯〕廬山の一峯。

〔江西九江府〕

〔二〕瀑布が、長き川を
挂けたる如くに望ま
る。

〔銀河〕あまのがは。

〔九天〕中央、四方、
四維の天を、九天と
いへど、ここ、ただ、
天といふこと。

〔白帝城〕四川夔州府。

故人西辭_ニ黃鶴樓_ヲ

烟花三月下_ニ揚州_ニ

孤帆遠影碧空盡_キ

惟見_ル長江天際流_ニ

望_ム廬山瀑布_ヲ

同 上

日照_{シテ}香爐生_ス紫煙_ヲ

遙看_ル瀑布挂_{ルヲ}長川_ヲ

飛流直下三千尺

疑_フ是銀河落_{ルカト}九天_{ヨリ}

早發_ス白帝城_ヲ

同 上

朝辭_ス白帝彩雲間

千里江陵一日還_ル

兩岸猿聲啼不住_ラ

輕舟已過萬重山

除夜作

唐高適達夫

旅館寒燈獨不眠_ラ

客心何事轉淒然

故鄉今夜思_フ千里_ヲ

霜鬢明朝又一年

江村即事

唐司空曙文明

〔三〕今夜、千里をも隔
てたる遠き故郷の事
を思ふ。
〔霜鬢〕白き鬢の毛。
白頭。

〔彩雲間〕白帝城山、
蜀中に在りて甚高し。
故にいふ。
〔江陵〕湖北荊州府。
荊州記に、朝發白帝
城、暮至江陵、其間
千二百里とあり。

〔除夜〕年の最終の夜。

(三)眠りたるうちに、
(四)よしや、今夜風吹きて、船を流したりも、蘆花淺水の邊に在りて、遠くは行かじの意。

〔江南〕金陵をいふ。江南江寧府。宋齊梁陳の都せし處。
〔山郭〕山のくわをなしたる里。
〔酒旗〕酒を賣る店の看板の旗。
〔八十〕の十、シン。金陵は、佛教の盛行はれし地にて、七百餘寺ありしが、亂後にも、四百八十寺ありまへり。
〔多少〕多き意。少の字帶言。

釣罷歸來不繫船。江村日落正堪眠。

縱然一夜風吹去。只在蘆花淺水邊。

江南春 唐杜牧 牧之 樊川

千里鶯啼綠映紅。水村山郭酒旗風。

南朝四百八十寺。多少樓臺煙雨中。

山行 同上

遠上寒山石徑斜。白雲生處有人家。

停車坐愛楓林晚。霜葉紅於二月花。

淮上與友人別。唐鄭谷 守愚

揚子江頭楊柳春。楊花愁殺渡江人。

數聲風笛離亭晚。君向瀟湘我向秦。

東欄梨花 宋蘇軾 子瞻 東坡

〔淮〕水の名。江南淮安府。

〔愁殺〕シウサイ。揚子江を渡る人を愁へさす。

〔瀟湘〕湖廣長沙府。〔秦〕陝西西安府。

〔淡白〕うすしろし。

深青と對す。淡泊さ
 誤るべからず。
 〔惆悵〕いたましく思
 ふ。
 〔一株雪〕梨花をいふ。
 〔清明〕二十四氣の一、
 三月の節。
 四人の一生の中に、
 何回、此の如くよき
 春にあはるか、多
 くは、あはれじの意。
 〔堂堂〕盛なるさま。
 〔斗牛〕二十八宿北方
 玄武中なる南斗牽牛
 の二星。
 一雄氣、天を衝く意。
 〔君讎〕金。
 〔頑惡〕秦檜王倫等。
 〔車駕〕皇帝のみくる
 ま。徽宗欽宗を指す。
 〔四壇〕登りて、大將
 に拜せられ、萬戸侯
 に封ぜらる、即、功

名富貴は、望むこと
 にあらずの意。
 〔光陰〕日かげ。即、
 時間。
 〔三四〕春なりと思ひて
 ある内に、いつのま
 にか、秋になりてあ
 る。時の過ぎやすき
 意。夢さいひても、
 眞の夢にあらず。

梨花、淡白柳、深青。柳絮飛、時花滿城。

惆悵、東欄一株雪。人生看得幾清明。

題、青泥市、寺壁、宋岳。飛鵬舉

雄氣堂堂貫斗牛。誓將眞節報君讎。

斬除頑惡還車駕。不問登壇萬戸侯。

偶成 宋朱 熹 元晦 晦庵

少年易、老學難成。一寸光陰不可輕。

未覺池塘春草夢。階前梧葉已秋聲。

題、秋江圖 元倪 瓚 元鎮 雲林

長江、秋色渺無邊。鴻雁來時水拍天。

七十二灣明月夜。荻花楓葉覆漁船。

〔故郷〕放翁は、浙江
 紹興府山陰縣の人。
 〔鏡湖〕又、鑑湖とい
 ふ。
 〔嫩莎〕わかくさ。
 〔十風五雨〕論衡に、
 太平之世、五日一風、
 十日一雨とあるを、
 こゝさらに、かへて
 用ゐ、太平の世の意
 を伏す。
 〔窮通兩忘〕世に用ゐ
 られずして、困窮す
 ると、世に用ゐられ
 て、通達するとは、
 いづれも、心にこめ
 てをらすの意。

七言律

村居初夏

宋陸

游務翁觀

天遣爲農老故郷。

山園三畝鏡湖傍。

嫩莎經雨如秧綠。

小蝶穿花似繭黃。

斗酒隻雞人笑樂。

十風五雨歲豐饒。

相逢但喜桑麻長。

欲話窮通已兩忘。

過零丁洋

宋文

天祥

宋瑞文山

辛苦遭逢起一經。

干戈落落四周星。

山河破碎水漂絮。

身世浮沈風打萍。

皇恐灘邊說皇恐。

零丁洋裏歎零丁。

人生自古誰無死。

留取丹心照汗青。

〔零丁洋〕廣東廣州府
 香山縣の東、厦門香
 港の間に在りといへ
 り。
 〔起一經〕經義の試問
 に及第し、學問によ
 りて身を起したるを
 いふ。
 〔落落〕不相入貌。兵
 戦のかたつかぬをい
 ふ。
 〔四周星〕歳星の四周
 する。四年といふこ
 と。
 〔三國破滅〕して、水の
 柳の花を漂すが如く。
 〔四身流浪〕して、風の
 萍を打つが如し。萍、
 水草。
 〔皇恐灘〕江西吉州府
 皇恐、あわてをそる
 意。
 〔零丁〕危く弱くある
 意。

〔汗青〕青き竹を火にて炙り、汗をこりたるもの。紙なき時代に用ゐたる簡のこまこま、歴史をいふ。

〔行〕詩の體制の名。

(一) 掌を上向にすれば、雲となり、下向にすれば雨となり。是、忽ち親しくなり、忽ち疎くなり、人情變化の速なるをいふ。
〔紛紛〕多し。
〔管鮑〕管仲夷吾、鮑叔牙、共に齊の大夫、貧賤にして善く交りたる人。

七言古

貧交行

唐杜

甫
少陵美

翻^{セバ}手^ヲ作^リ雲^ト覆^{セバ}手^ヲ雨^{トナル}

紛紛輕薄何須^{ハシ}數^ヲ

君不^ズ見^ズ管鮑貧時交

此道今人棄^テ如^シ

土。

豫章終

正誤表

| | | | | | | | | | | |
|----|-----------|---------|---------------|------|------|-----|--------|---------|---------|---------|
| 頁行 | 三 | 二 | 三 | 四 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 |
| 誤 | 山寺觀楓ノ下ニ脱ス | 柳絮ノ下ニ脱ス | 山田天山過蘆花村ノ詩ヲ | 六過春ニ | 四海山一 | 二稷稊 | 五敬文(名) | 作者ノ名同上ヲ | 作者ノ名同上ヲ | 作者ノ名同上ヲ |
| 正 | 作者ノ名同上ヲ | 作者ノ名同上ヲ | 草場船山過晴氣村ノ詩ノ次ニ | 過二晴 | 海山一 | 懷懷 | 坳叟(號) | 作者ノ名同上ヲ | 作者ノ名同上ヲ | 作者ノ名同上ヲ |
| 頁行 | 五 | 六 | 七 | 八 | 九 | 十 | 十一 | 十二 | 十三 | 十四 |
| 誤 | 六巳中 | 五不動 | 五滿腔 | 五輟帚 | 三鼻鳩 | 五の鎧 | 二さはる | 六巳中 | 五不動 | 五滿腔 |
| 正 | 巳中 | 不駭 | 一腔 | 輟帚 | 鼻鳩 | の鎧 | さはる | 巳中 | 不駭 | 一腔 |

大正三年三月一日印刷
大正三年三月八日發行

編纂兼發行者

佐賀市中等學校聯合編纂會

右代表者

藤井 鏡

佐賀市赤松町四十一番地

印刷者

立川 正太郎

佐賀市大字紺屋町八十六番地

印刷所

佐賀印刷株式會社

佐賀市大字水々江町三十五番地

發行所

佐賀市中等學校聯合編纂會

佐賀市赤松町



終

